

III 遺 物

1 奈良・平安時代の遺物

今回の調査では、土器、瓦、木製品、金属器等の遺物が整理箱にして二千箱近い量が出土している。これらの大半は西1坊々間大路西側溝S D920の堆積層から出土したものである。

A 土 器 (fig.12~15、PL 8・9)

大量の土器が出土している。奈良・平安時代の土師器・須恵器・黒色土器、緑釉陶器・製塩土器のほか弥生時代の土器、古墳時代の土師器や須恵器それに埴輪がある。土器の大部分はS D920から出土したものであり、他に井戸や土壌、遺物包含層からも土器が出土している。なお土器の記述に際しては奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠する。

(i) 井戸SE930出土の土器

土器は上層と下層の両層から出土している。上層は井戸改修後の堆積である。1・3・4・7・8・9は上層、2・5・6・10および呪符を記した土師器蓋は下層から出土した。奈良時代の土師器・須恵器のほか弥生式土器が出土している。弥生式土器については別項に譲る。

土師器 皿A(7)はa₀手法。口径14.8cm。皿C(6)は底部に粘土紐接合痕を残す。内底面に漆が付着する。杯B蓋(fig.24-1)は井戸の最下層から出土した。頂部外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヨコナデで調整する。内外両面に呪符を墨書する。口径14.4cm。なお呪符については後述する。

須恵器 杯Bには杯BI(3)・杯BII(2)・杯BIII(1・5)がある。3は底部ヘラキリのまま。口径19.3cm、高さ5.0cm。2は底部ヘラキリの後ナデを加える。底部外面に「令」の墨書がある。口径17.3cm、高さ5.6cm。1は底部ロクロケズリの後ナデを加え、口縁部下半をロクロケズりする。口径13.2cm、高さ4.0cm。5は口縁部がゆるく内湾してひらく。底部はヘラキリのままである。口径13.0cm、高さ3.6cm。4は杯BIII蓋である。頂部外面はロクロケズりする。口径12.8cm。壺H(8)、底径7.5cm。甕(10)はほぼ完形で出土した。球形の体部に端部が軽く屈曲してゆるい段をなす「く」の字状の口縁部がつく。体部最大径は中位よりやや上にあり、内面に内心円当具痕を残し外面は格子目叩きで調整する。底部は小さな平底状をなす。口径23.4cm、高さ39.9cm。9は壺Nで肩部と体部中位に縦の把手がつく。体部外面はロクロケズりする。内面肩部から底部にかけて白色物質が厚く(底部で2cm)付着する。この物質は分析の結果、水礬土(gibbsite)であることが判明した。

下層の土器は平城宮土器Ⅲに、上層の土器は平城宮土器Ⅴに属する。

(ii) 包含層・土壌SK903出土の土器

11坪の西辺部には土取りの及ばない面があり、厚さ30cm程の暗灰色の遺物包含層があり、奈良時代の土器が出土した。四周を土取り穴で破壊されているため土壌の可能性もある。

土師器には杯C・高杯・甕がある。杯Cは放射暗文をもつ。高杯(15)は断面9角に面とりした脚部で、内面に棒を芯にして成形した痕跡がある。須恵器は杯A・杯B・杯B蓋・鉢A・甕がある。杯A(13)は底部ヘラキリ後ロクロケズリ仕上げ。口径15.4cm、高さ4.7cm。12は杯Bで底部切離しのまま。口径12.0cm、高さ4.6cm。11は杯B蓋である。口径18.4cm。17は甕の破片である。口縁部内外面はロクロナデ、肩部内面は同心円当具痕、外面にはカキメがある。口径28.6cm。16は長い体部に「く」の字形の口縁部がつく。土師器長胴甕に良く似た形態である。口縁部内外面のヨコナデはロク

口回転を利用している可能性がある。体部外面は縦位の平行叩目があり、その上に間隔を置いて細い帯状にスリケンを加える。14は鉢Aで口縁部を除く外面をロクロケズリする。口径22.2cm。これらの土器には平城宮土器Iの特徴をもつものが含まれる。

西1坊坊間大路路面に掘られた土取穴SK903の底面から完形に近い土師器の羽釜が数点出土した。18はその一例である。口径20.7cm、高さ16.7cm。

(iii) 西1坊々間大路西側溝SD920出土の土器

土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、転用碗、漆付着土器、白色物質付着土器があり、土器の総量は整理箱で500箱を越える。そのうち土師器は160箱、須恵器は350箱、黒色土器1箱、製塩土器6箱で圧倒的に須恵器が多い。

土師器 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿C・高杯・椀A・椀C・椀D・椀E・壺A・壺A蓋・壺B・壺E・甕A・甕B・鉢A・盤A・盤B・鍋・竈等の器種がある。

杯A 20は底部内面にラセン暗文・口縁部内面に一段放射暗文・連弧暗文をもつ。b₁手法。口径20.3cm、高さ4.1cm。21は一段の粗い放射暗文がある。b₁手法。口径20.0cm、高さ3.5cm。24は密な一段の放射暗文をもつ。a₀手法。口径17.4cm、高さ3.5cm。22—c₀手法。口径19.0cm、高さ5.3cm。23—c₃手法。口径19.0cm、高さ4.7cm。29—b₀手法。口径15.6cm、高さ2.6cm。26は口縁部内面及び口縁部外面上端をせまくヨコナデする。口径13.6cm、高さ2.7cm。25は平底に直線的な口縁部がつく。口縁部ヨコナデ、底部外面不調整。口径13.8cm、高さ4.0cm。20・26・29は第2層出土。21・22・24・25は第3層出土。総数905点出土。なお杯Bは、総数20点出土している。

杯C 27は放射暗文をもつ。b₀手法。口径14.8cm、高さ2.9cm。33はa₀手法。口径19.2cm、高さ2.5cm。32はa₀手法。外底面に木葉圧痕がある。口径16.6cm、高さ3.1cm。34は暗文をもたない。a₀手法。口径19.6cm、高さ2.6cm。27は第2層出土。32・33・34は第3層出土。総数97点出土。

皿A 31はc₀手法。口径16.6cm、高さ2.8cm。30はc₀手法。口径16.2cm、高さ3.0cm。35はc₀手法。口径22.0cm、高さ3.0cm。28はロクロ成形で、底面にヘラキリ痕を残し、口縁部内外面をロクロナデする。口径15.0cm、高さ2.4cm。これらは第3層出土。総数1546点出土。

皿B いずれも内面にラセンと一段の放射暗文をもつ。60・62は口縁部外面に粗いヘラミガキを加える。62は口縁部下端にヘラケズリがある。60は口径29.6cm、高さ3.4cm。61は口径32.6cm。62は口径35.5cm、高さ3.3cm。60・62が第2層出土、61は第3層出土である。総数6点出土。

皿C すべてe手法。底部中央を小さくくぼませるもの(41・42)がある。口径は9.0~11.8cm、高さは2.1~2.6cm。39は灯火器。38・40・41は第2層出土。39・42・43は第3層出土。436点出土。

椀 椀A(47~51)、椀C(57・58)、椀E(53)などがある。椀Aは51が口径9.4cm、高さ3.4cmでやや小型で、他は口径12cm前後、高さ3.0~4cm。外面の手法は47—c₃手法、48—a₃手法、49—a₁手法、50—c₀手法、51—a₀手法である。48・49・51は第2層出土、47・50は第3層出土。椀Aを除く椀類は共通して内面と口縁部外面をヨコナデし、底部は不調整とする。53—口径14.4cm、高さ4.1cm。54—口径13.8cm、高さ3.8cm。56—口径13.0cm、高さ4.0cm。57—口径14.2cm、高さ4.8cm。58—口径13.6cm、高さ4.5cm。底部外面に粘土紐接合痕跡がある。59—口径13.8cm、高さ5.1cm。53は第2層出土、他は第3層出土。椀A509点、椀C355点、その他の椀は101点出土。

高杯 68は脚部内面に棒を芯にして成形した痕跡がある。裾部内面に「政所」の墨書がある。杯部径18.2、高さ14.9cm。第3層出土。65は内面にラセン暗文と放射暗文を飾る。口径30.3cm。第3層出

土。66は暗文をもたない。口径29.6cm。第4層出土。67は杯部が通例とはことなっており、杯・皿類と共通する形態をとり、杯底部端に鐳をめぐらす異形の高杯である。脚部を縦のヘラケズリで面とりする点は一般の高杯と変わらない。口縁部には杯・皿類と同様の屈曲があり、端部は巻き込むものであろう。杯部内底面にラセン暗文、口縁部内面に一段放射暗文と連弧暗文がある。口縁部と鐳の部分はヨコナデし、杯部外底面はヘラミガキする。第3層出土。総数595点出土。

蓋 36は杯Bの蓋で、37は壺Aの蓋と考えられる。ともに口縁部外面・頂部外面を丁寧なヘラミガキを施す。36は口径16.4cm、37は口径17.8cm。杯B蓋は総数92点、壺蓋は2点出土。

壺A 69は須恵器壺Aと同形である。体部に三角形の把手を貼りつけ、口縁部外面と高台外面を除く外面全体をヘラミガキする。口径14.0cm、高さ12.5cm。総数17点出土。

甕 70は小型の甕である。ほぼ完形。体部上半はまるくならず直線的にのびる。体部内面上半は縦のヘラケズリ、下半は同心円当具痕を残す。体部外面を平行叩きした後、ハケメ調整する。口径14.5cm、高さ12.9cm。第2層出土。71は小型の甕もしくは壺である。器面が荒れ手法は観察できない。口径12.2cm、高さ7.3cm。埋立土から出土した。74は球形体部の中形甕である。体部外面はハケメ、内面上半及び口縁部内面にもハケメがある。口径22.6cm、高さ21.6cm。第2層出土。73は長胴ぎみの大形の甕。口径31.8cm、高さ34.6cm。第2層出土。72は高台状の台脚がつく甕で、平城宮S B 7802(『平城宮発掘調査報告XI』pl.131-36)に類例がある。第3層出土。甕Aは総数3063点出土。

鉢 64は平らな広い底部に内湾ぎみの口縁部がつく。口縁端部が小さく屈曲する。a₃手法。口径20.2cm、高さ6.0cm。第2層出土。55は小さな平底に大きく内湾する口縁部がつくもの。口縁端部は内側に小さく肥厚する。内面全体に煤状の物質が付着する。b₁手法。口径13.0cm、高さ4.9cm。第3層出土。総数7点出土。

盤A 63は底部外面をヘラケズリする。口径22.4cm、高さ5.3cm。第2層出土。総数23点出土。

竈 総破片数は1000点に及ぶが、全形のわかるものは2個体に過ぎない。75は背面を欠く他は大部分の破片が残るもので前面に方形の焚き口をくりぬき、廂を貼りつける。体部両側面の対称位置に円孔をあける。体部外面は縦方向のハケメ、体部内面及び廂両面はナデとヨコナデで仕上げる。廂前面及び体部内面には煤が付着し、使用の跡が著しい。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。前面幅35.6cm、前面廂部分での高さ35.2cmである。竈はそのほとんどが小破片であって、破片の接合に努めたものの接合するものは少なく、個体数の算定には困難な条件が多い。ここでは個体の識別が比較的容易な廂部分をとりあげ、破片数、出土層位について述べる。廂部分の総破片数は438点である。廂の向かって正面、右側、左側の各部分毎に記す。正面は第1層—1点、第2層—42点、第3層—145点、第4層—7点である。右の部分は第1層—1点、第2層—25点、第3層—80点、第4層—2点である。左の部分は第2層—30点、第3層—85点、第4層—11点である。総体的にみて、第2層および第3層が多くを占める。これから敢えて個体数を算定するならば、最大値は各部分の総和から、429個体、最少値は部分数で最も少ない値から、108個体ということになる。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯E・杯L・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・皿E・椀B・高杯・鉢A・鉢F・盤・壺A・壺A蓋・壺B・壺C・壺G・壺H・壺K・壺L・壺M・壺N・平瓶・横瓶・甕A・甕Eなどの器種がある。

杯A・E・L 84・85は杯L。84は口縁部と底部との境が稜をなす。口径19.5cm、高さ4.6cm。第3層出土。85は口径17.9cm、高さ3.0cm。第4層出土。89は口縁部中位に2条の凹線を巡らし口縁部

上半は薄く立上がり、1条の凹線を巡らす。口径17.3cm、第3層出土。88は杯Eで、口縁端部は内傾面をなす。口縁部外面中位と底部外面をロクロケズリする。口径16.8cm、高さ4.6cm。第3層出土。杯Aはいずれも底部ヘラキリのまま。94—口径11.8cm、高さ3.5cm。87—口径15.1cm、高さ3.4cm。95—口径10.8cm、高さ3.0cm。81—口径16.6cm、高さ4.4cm。80—口径16.5cm、高さ5.1cm。80・81・94・95は第3層出土、87は第4層出土。杯A460点、杯E8点、杯L40点出土。

杯B 106—口径15.3cm、高さ4.6cm。90—口径16.5cm、高さ5.1cm。107—口径13.0cm、高さ4.2cm。108—口径10.6cm、高さ3.6cm。106は第2層、90、108は第3層、107は第4層出土。2198点出土。

杯B蓋 82・83は環状つまみをもつ。82は頂部が高く端部で強く屈曲する。口径20.0cm。83の頂部は低平で端部の屈曲は82に比べて弱い。口径20.0cm。いずれも丁寧なロクロナデとナデで仕上げる。82は第3層出土、83は第2層出土。105—口径16.1cm。104—口径14.6cm。101—口径12.1cm。102—口径13.3cm。99—口径9.4cm。103—口径13.0cm。98—口径12.1cm。105は内面を硯に転用している。102が第2層出土、他は第3層出土。97は縁部が強く屈曲し頂部に突帯をめぐらす蓋である。口径13.0cm。第3層出土。総数2423点出土。

皿 91は口縁部に屈曲がある。口径22.0cm、高さ2.6cm。92は口径21.0cm、高さ2.8cm。86・93は皿Cである。86は口径17.6cm、高さ2.2cm。93は口径15.0cm、高さ1.8cm。96は皿Eで口径10.1cm、高さ2.0cm。いずれも第3層出土。皿A115点、皿B106点、皿C246点、皿E4点出土。

椀B 100は口径9.8cm、高さ8.0cm。第2層出土。総数5点出土。

壺A 134・135とも体部下半はロクロケズリする。135の底面には爪状圧痕がある。134は高さ14.5cm。135は高さ16.0cm。ともに第3層出土。総数33点出土。

壺B 131は肩部と体部の境に凹線をめぐらす。第2層出土。総数2点出土。

壺C 110は口径3.7cm、高さ5.2cm。第2層出土。総数3点出土。

壺G 125は底部糸切りで体部下半をヘラケズリする。高さ20.2cm。126は壺Gの祖型的なものである可能性がある。いずれも第3層出土。総数12点出土。

壺H 118は高さ8.5cm。115は高さ5.1cm。いずれも第3層出土。総数18点出土。

壺K 137は高さ22.0cm。第3層出土。総数11点出土。

壺L 120・130は体部中位以下を軽くロクロケズリする。120は高さ11.0cm。120は第2層出土。123・124・130は第3層出土。総数34点出土。

壺M 121・123は体部外面をロクロケズリする。すべて底部糸切り。122は第2層、121・123は第3層出土。総数19点出土。

壺蓋 113は壺Aの蓋。口径6.6cm。117は、口径5.3cm。いずれも第3層出土。63点出土。

平瓶 111・112は小型品で、古いタイプ。129は把手・高台をもつ新しいタイプで、口縁部が受け口状をなす。いずれも第3層出土。111は第4層出土、他は第3層出土。21点出土。

横瓶 136は内面に同心円当具痕、外面は平行叩きののちカキメを施す。3点出土。

甕 132は「く」の字状の口縁端部が外に肥厚する。体部内面に同心円当具痕、外面は縦位の平行叩目をのこす。口縁部外面に「十」の篋書がある。口径17.5cm。第3層出土。152点出土。

黒色土器 総破片数97点ある。杯A・杯B・皿A等の器種がある。完形が2点、3分の1ほど残るものが2点、他は細片である。両面を黒色処理する黒色土器Bは小片1点（第2層）、他はすべて内面のみを黒色処理する黒色土器Aである。内面に渦文状の暗文をもつものがある（18点）。杯A（46）

は口径13.6cm、高さ3.2cm。第2、第3、第4の各層から出土したものが接合する。

杯B 44は口径16cm、高さ4.6cm。第3層出土。45は口唇部内面が沈線状をなす。口径は16.6cmで高さ4.6cm。第2層出土。いずれも黒色土器A類。

44は奈良時代の土師器杯Bと共通する器形で、8世紀に入る可能性がある。これに対して45は黒色土器の盛行する段階に出現する新たな器形（椀形）であり、9世紀後半に属するものであろう。

転用硯 他の器種を硯に転用した転用硯がある。すべて須恵器であって総破片数211点ある。最も多いのは須恵器杯B蓋内面を利用したもので185点ある。ほかに皿B底部内面（2点）、皿B蓋内面（2点）、杯B底部17点（うち内面利用2点、外面利用15点）がある。また壺底部内面、壺底部外面や甕底部破片内面を利用したもの（各1点）もある。いずれも硯に用いた面はつつるに磨滅し、墨痕が残る。朱墨の硯に用いたもの（杯B蓋内面利用）も7点ある。総破片数211点の内、第2、第3層の両層で200点と全体の90%以上を占める。平面的にみた場合も出土状況に特に偏りは認められない。なお転用硯のうち、杯B蓋には環状つまみを持つものが2点ある。個体ごとの所属年代の判明するものでは8世紀の前半から後半にわたる各時期のものがある。

漆付着土器 土師器・須恵器に漆の付着したのものがある。土師器が113点、須恵器が608点で総破片数721点を数える。土師器、須恵器ともに第3層が最も多く第2層がこれにつぎ、他の層は少ない。土師器・須恵器とも出土状況をみると特に分布の集中する箇所はなくほぼ一様に出土している。

土師器では壺Cが60点と54%を占め、他は杯A（4点）、皿A（4点）、皿C（3点）、椀A（3点）、椀C（1点）、甕（3点）、盤（2点）、不明（33点）。出土層は第3層が最も多く52点、次いで第2層38点、第4層10点、他13点である。

須恵器では器種別にみると、壺類（壺A、壺Lなど）が480点と79%を占める。その他は杯A（11点）、杯B（10点）、杯B蓋（5点）、鉢A（4点）、平瓶（3点）、皿A（2点）、皿E（1点）、盤（1点）、不明（91点）である。層位別では第3層が462点で最も多く、次いで第2層（101点）、第4層（41点）、第1層（4点）と続く。これらの土器は漆容器として用いられたことは明らかである。多くの例では漆は器体の内面に付着するが、漆が土器の破れ口にまで及ぶものも少数ある。

白色物質付着土器 土器の内面に石灰状の白色物質の付着するものがある。この物質は先にも記したように水礬土（gibbsite）である。総破片数50点あり、すべて須恵器に限られる。出土層位は第2層がもっとも多く27点、第3層18点、第4層4点、第1層1点となる。平面的にも分散して出土している。器種の判明するものでは壺N 3点、平瓶1点、壺H 1点、他は壺類の小片である。土器には厚さ1～2mmに付着している例が多く、前述した井戸S E 930出土の須恵器壺N（10）のように厚さ2cmに達する例もある。

製塩土器 総破片数3000点を越す。第2、第3層出土のものが大部分を占め、平面的に見た場合も特に分布の集中はみられない。製塩土器のほとんどは細片で形態が完全に分かる資料はなく、個体数の算定も困難である。52は内湾する厚い口縁部に薄い体部が続くもので、内外面とも粗いナデで仕上げられる。底部の形態は明らかでない。赤褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は脆い。口径10.4cm。他の大部分の破片もこれと同様の形態、胎土、色調、焼成の特徴をもつ。器壁の厚さは0.5～1.0cm前後のものが大部分である。外面には粘土紐接合痕をとどめるものも多い。また少数例には外面に粗い叩目を残すものや、内面に布目圧痕を残すものがある。布目の密度は1cm²あたり10×10本程度の粗いものと30×30本あるいはそれ以上の細かいものがある。

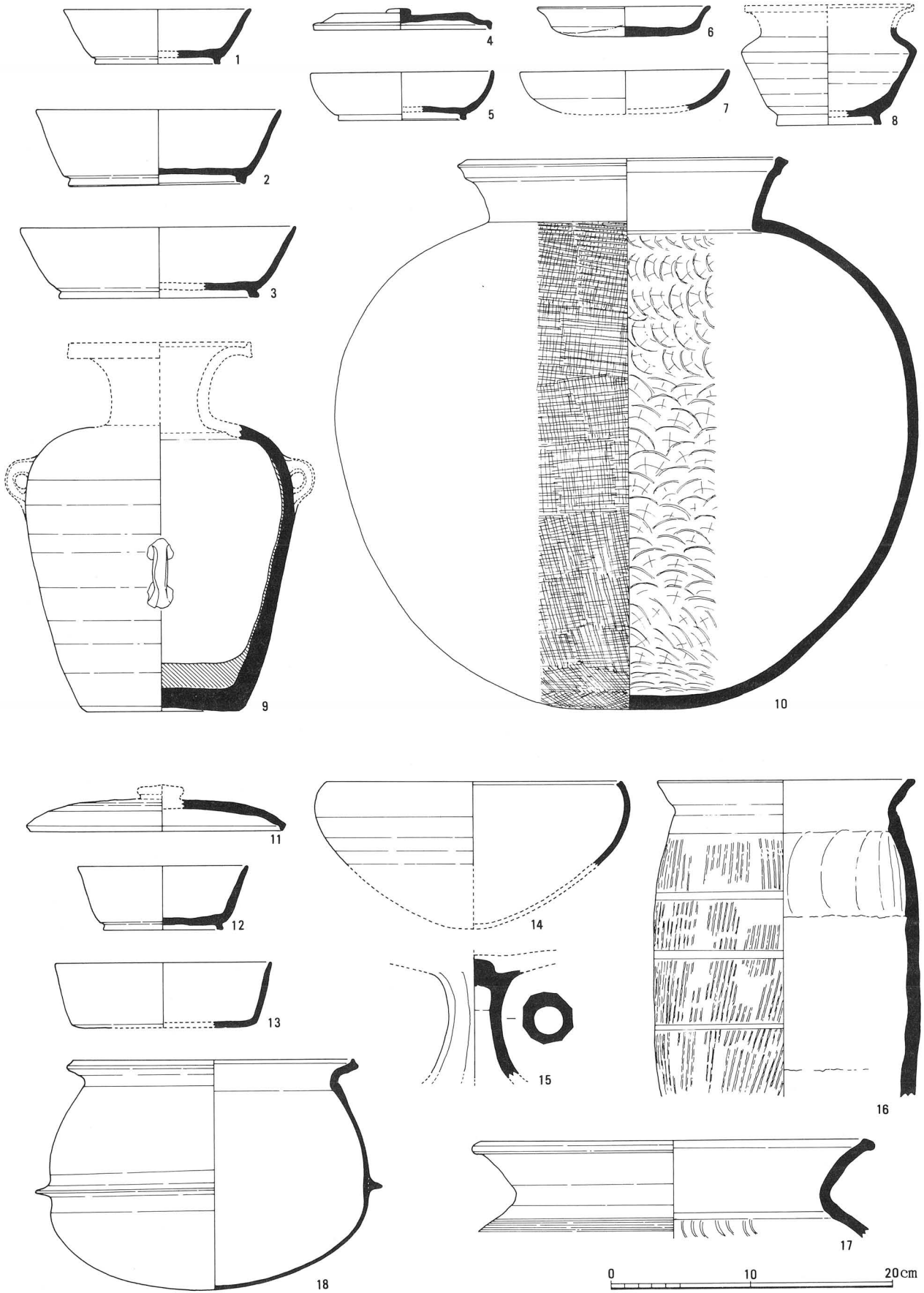


fig.12 土器実測図(1) (1~10: S E930, 11~17: 包含層, 18: S K903)

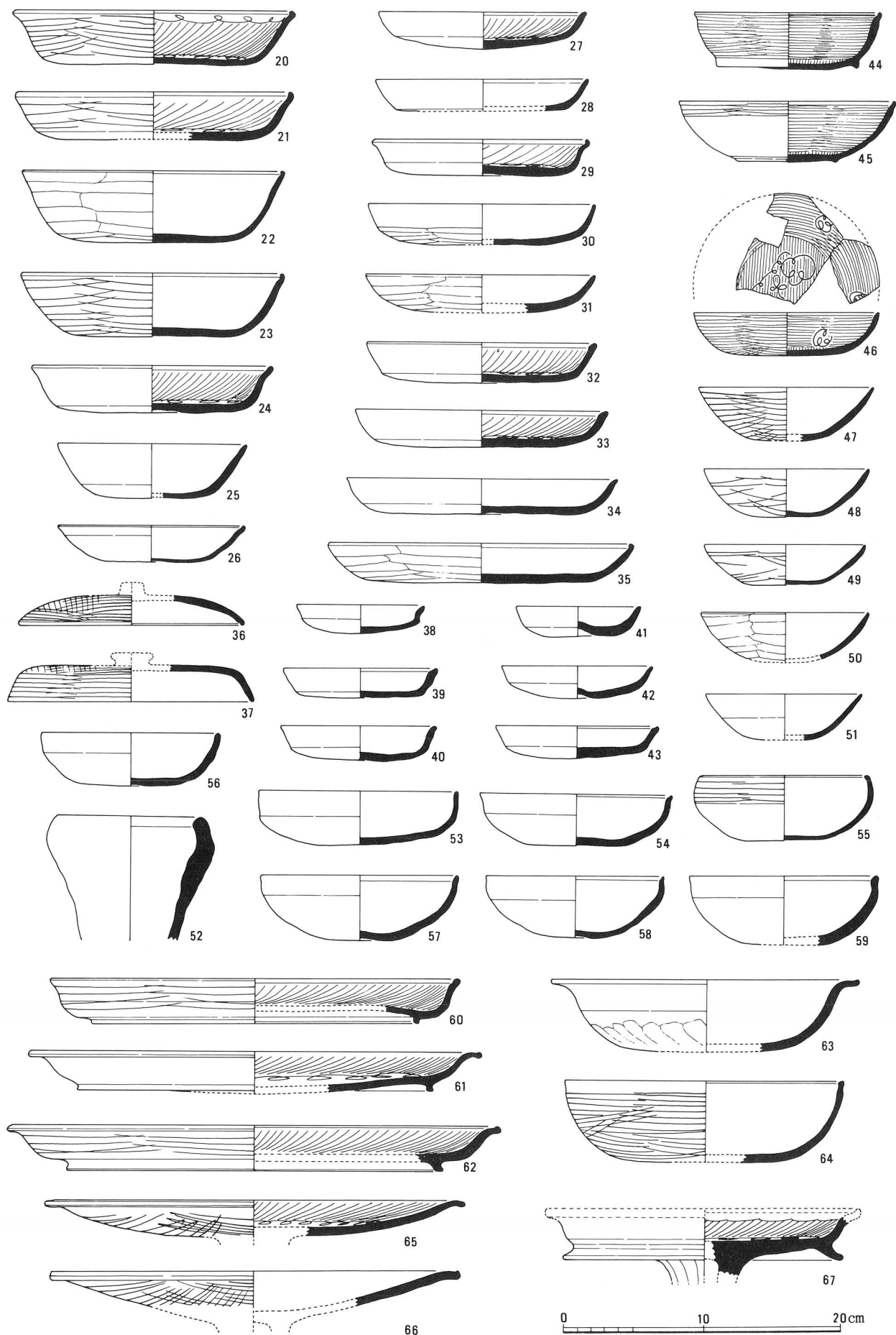


fig.13 土器实测图(2)

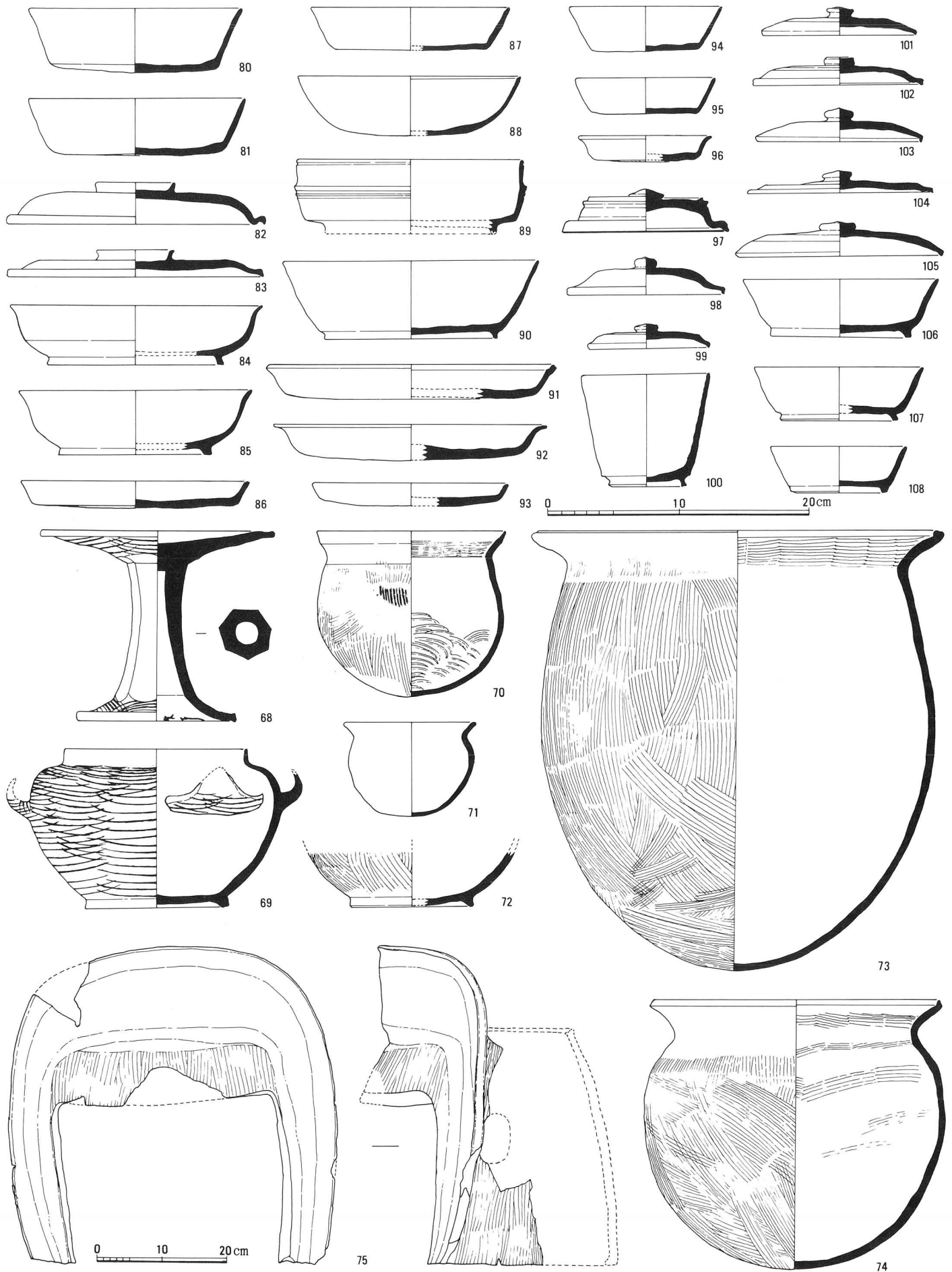


fig.14 土器实测图(3)

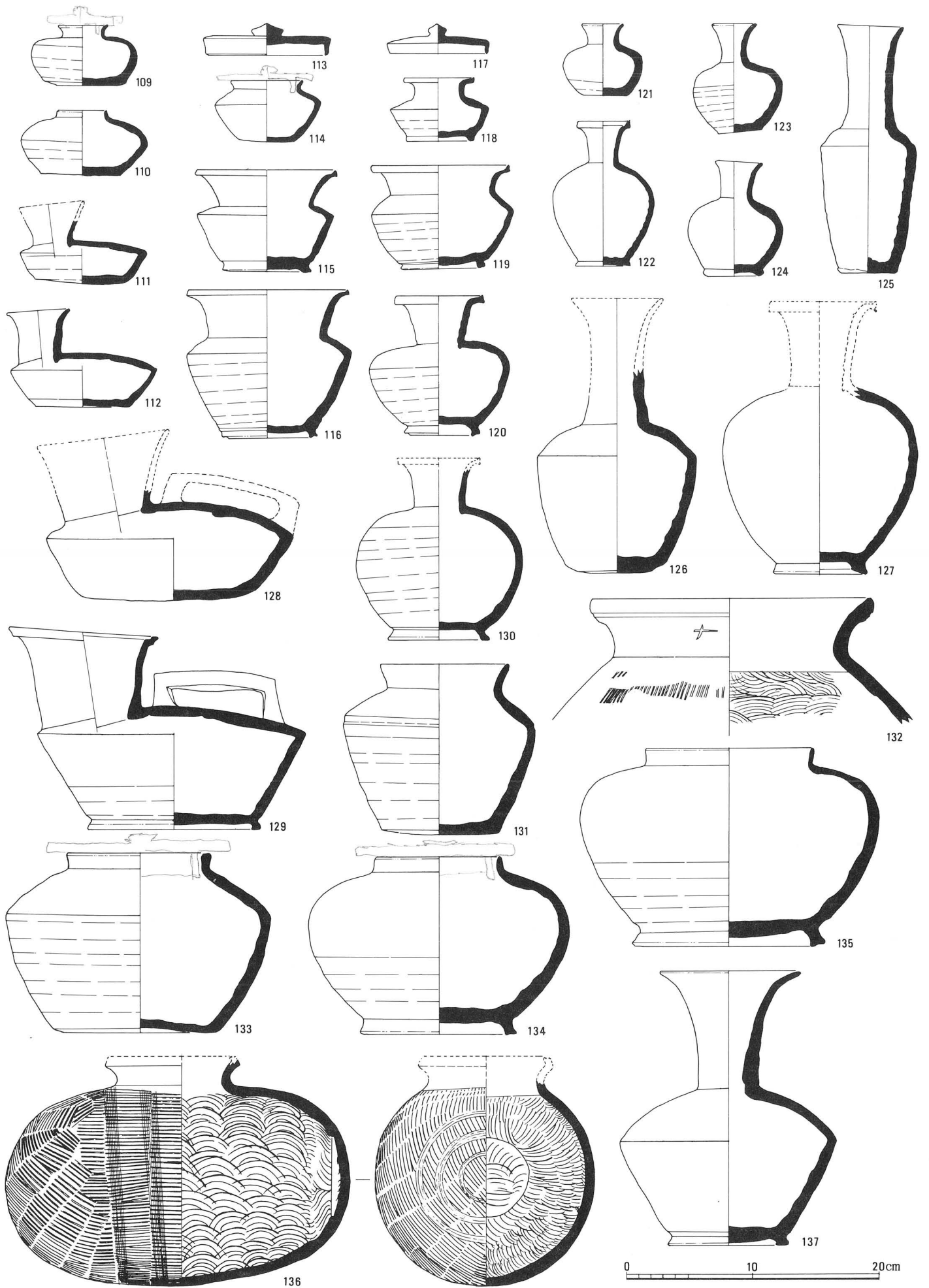


fig.15 土器実測図(4)

B 祭祀用土器・土製品

(i) 墨書人面土器 (fig.16~18、P.L.10・11)

西側溝S D920の堆積層から人面や墨線を組み合わせた文様を描いた土器が総数509点出土した。層位毎の内わけは、第1層8点、第2層114点、第3層347点であり、第3層が圧倒的に多い。第4層出土のものは、人面や人面を描いた土器で全容が知れるものはない。他の遺物と同様に層を超えて接合するものや、同じ形態のものが層位を超えて認められるので、主として第2層・第3層出土のものについて一括して記述する。人面や墨線を組み合わせた文様が描かれた器種は、高杯の1例 (fig.24の2)を除く他は、甕か壺のいずれかである。甕形態には、日常生活で使用する甕と同形態のものと同様に人面を描くために特別に作られたものがある。後者については、形態的には甕であるが、前者と区別する意味で以下壺Bとして記述する。人面が描かれるもう一つの器種には口径10cm、器高5cm程度の小型壺があり、これについては壺Cとして記述する。また墨線を組み合わせた文様については、人面ではないが、墨書人面土器の祭祀と関連があると思われるのでここで扱う。また人面を描いていないが、人面を描いた壺Bと同形態のものも約200個体程出土しており、これらも人面を描いたものと一緒に祭祀に使用されたと考えられるので、これについても合わせて記述することにした。

日常生活する甕に人面を描いた例は50点ある。口径14.5cm、器高11cm程度の小型甕(10)と口径23cmを超える大型甕(21)があり、量的に見れば後者が多い。10は完形品であるが、底部には焼成後穿たれた小孔をもつ。おそらく、仮器としての性格を付与するために人面を描く前あるいは後に穿孔したものである。球形の体部と外反する口縁部からなり、口縁端部を内側に折り返し丸く肥厚させている。胴部外面をハケメで内面をナデで調整する。胴部の相対する面に同趣の人面を描く。人面は丸い輪郭の内に顔の要素を描くが、耳・ひげの表現はない。21は卵形の長い体部と外反する口縁部からなり、口縁部を小さく上方につまみ上げる。胴部外面をハケ目で内面をナデで調整。破片のため人面の全容は定かでないが、輪郭線はなく耳の表現をもつ。

人面用に特別に作られた壺Bには、さまざまな形態があるが、形態の差を超えて次のように共通する特徴がある。一つは、製作法であり、椀や皿状のものを型として使い、型の内に粘土板・粘土紐を押し付けて底部を作り、その上に粘土紐を巻き上げ上部を構成する点である。もうひとつは、調整における共通性であり、胴部内面をナデや削りで調整するが、外面は頸部直下もしくは底部近辺まで軽くハケメを加える例(35)も若干存在するが、多くは調整を加えず体部外面に粘土紐痕跡と型のあたった痕跡をとどめる。壺Bで全体の形が知れるものは数例にすぎないが、以下のような形態がある。

A形態(1・2)は出土した壺B類では最も大きく、比較的狭い底部と直線的に外方に開き、頸部直下で内側に折れ曲る体部と外反する短い口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。**B形態**(8・19・35・36・38)は、比較的広い底部と丸味をもつ胴部と外反する長い口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。頸部のやや下位に上向きの把手を付す例(35)もある。胴部内面をナデ調整するもの(8・19)、ハケメを施すもの(36)、ヘラ削りを施すもの(35)がある。**C形態**(11・13・14)は、丸味を有する胴部と外反する比較的長い口縁部からなり、口縁端部を内側に折り返し丸く肥厚させる。**D形態**(15・39)は、比較的広い底部と張りのない長胴部と直線的に外方に開く口縁部からなる。口縁端部を小さく上方につまみ上げる。胴部内面をヘラケズリするもの(39)とハケメを施すもの(15)がある。**E形態**(31・37・40)は、比較的狭い底部と内湾気味に外方に開く胴部と外反する口縁部か

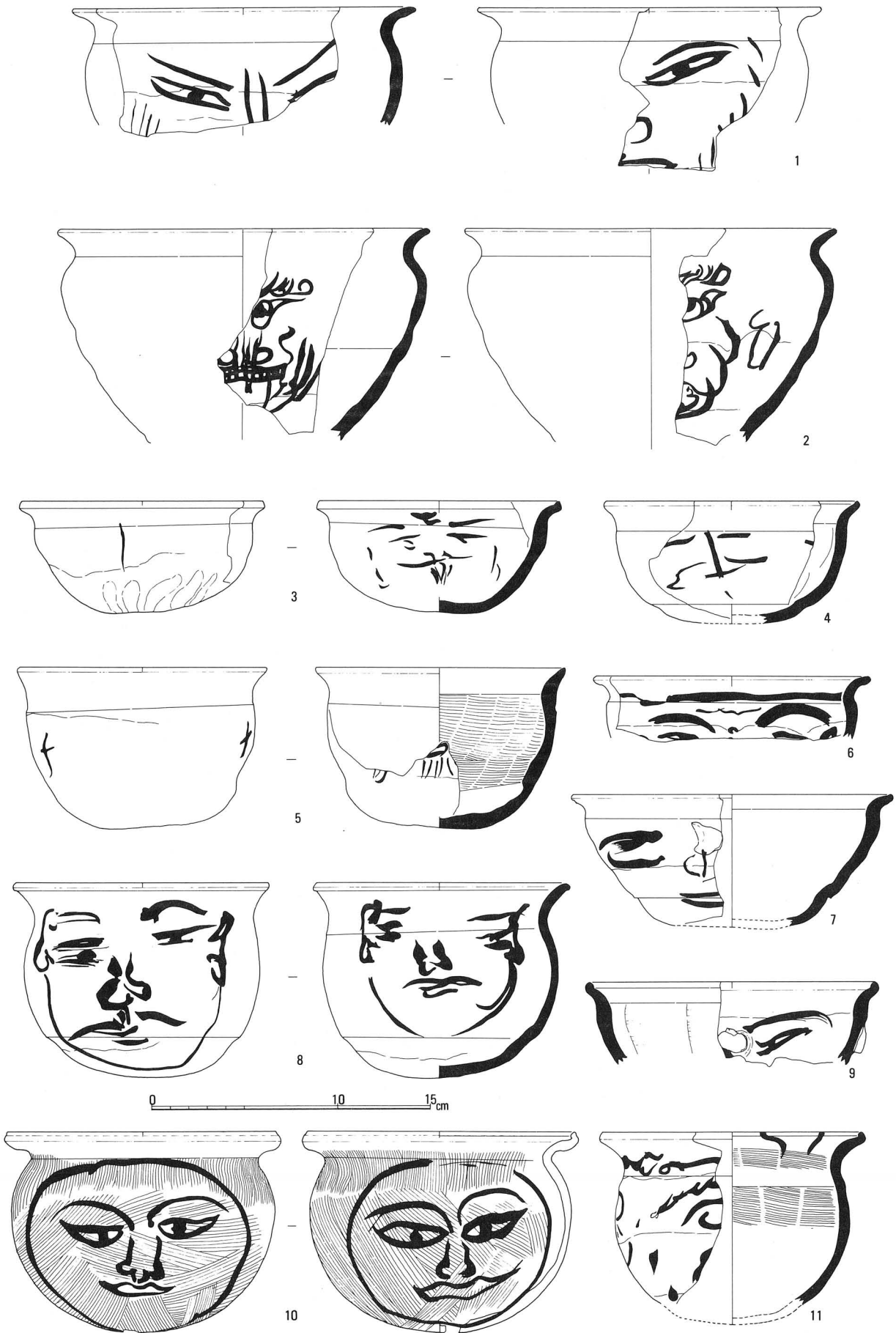


fig.16 墨書人面土器実測図(1)

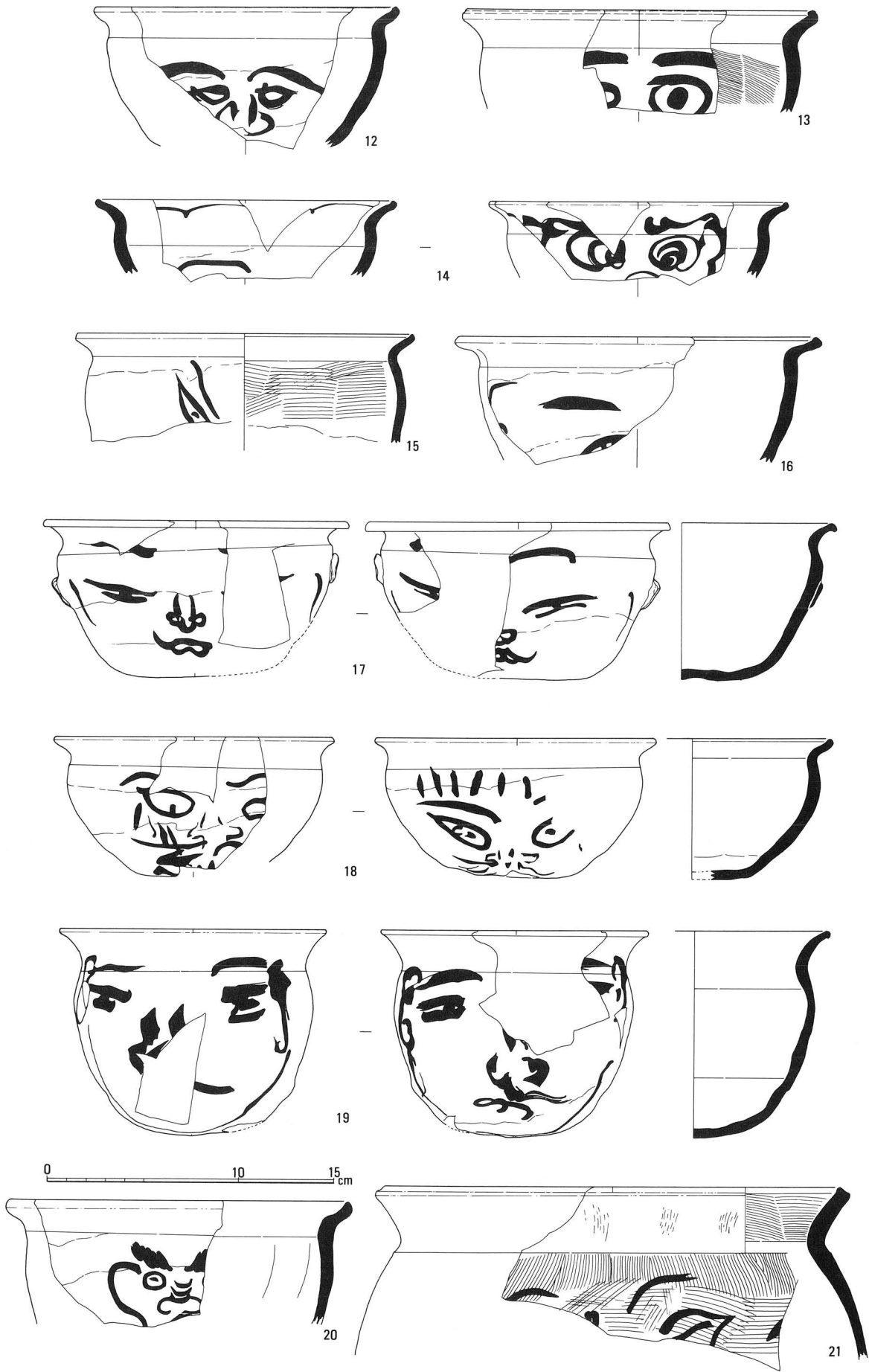


fig.17 墨書人面土器実測図(2)

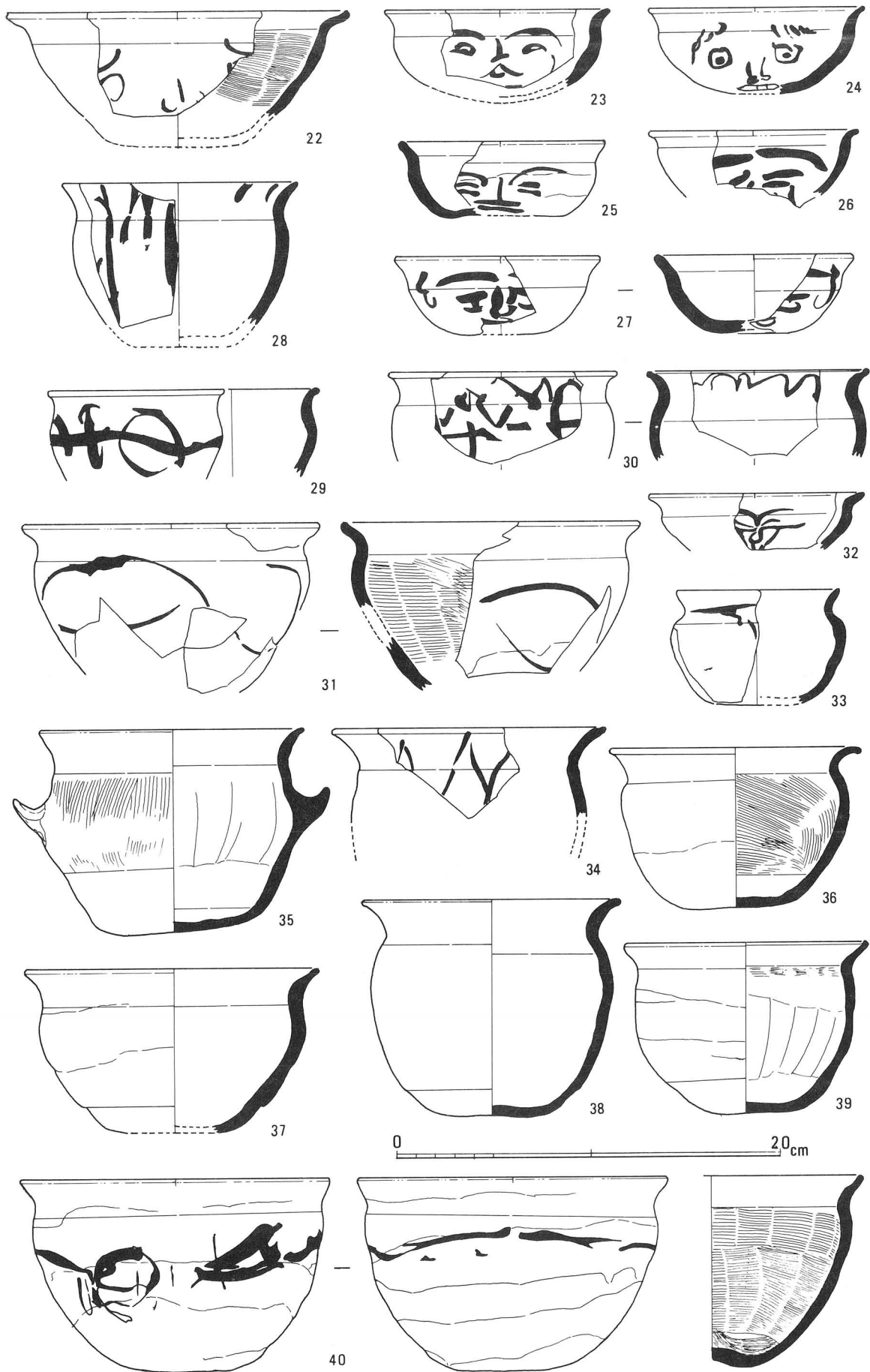


fig.18 墨書人面土器実測図(3)

らなる。口縁端部はわずかに肥厚する。胴部内面をヘラケズリするもの(37)とハケメを施すものがある。F形態(7・16・17)は、比較的狭い底部と大きく外側に開く胴部と直角に近い角度で折れ曲る短い口縁部からなる。G形態(20)は、長胴と内湾する口縁部からなる。H形態(6)は胴部以上を欠損するが、外反する口縁部で端部近くを水平方向に引き出している。端部は丸くおさまる。I形態(12・18・22)は、器高が口径の半分程度で外方に開く胴部と内湾気味に外方に開く口縁部からなる。端部は小さく肥厚する。J形態(3~4・9)は、I形態に近いが、さらに小型化し、口縁端部は、小さく上方に突出する。F・J形態にはボタン状の貼り付け把手を持つ例がある。

壺C(fig.19の28~39)は前述の壺Bと異なり、粘土紐を巻き上げて成形している。胴部内面は、ヘラケズリやナデで調整するが、外面は調整せず粘土紐の痕跡をとどめる。壺Cにもさまざまな形態があり、ここでは、器高が口径の半分前後のものについて、口縁部が外反気味に開くもの(A形態-23)、外反気味に開き、端部が小さく肥厚するもの(B形態-30)、口縁部内面がわずかにくぼむもの(C形態-25)、小さな肩をもつ体部と直角に近い形で立ち上る口縁部をもつもの(D形態-31、69)に分類できる。この他に長胴で比較的長く外反する口縁部をもつE形態(29、34)がある。壺Cは、総数180点程出土したが、このうち人面もしくは墨線で文様を描いた例は16点しかない。人面を描かない壺Cは描いたものと同様に人面土器祭祀に使用される場合と、後述する小型炊飯器セットの甕としても使用された可能性がある。

壺B・Cで描かれた人面の数が分る例では、1面だけ描かれた例は2例(3・5)だけで、他は胴の相対する2面に描かれている。1面だけ描いた例では、対する面に縦線を描くもの(3)と「+」の墨書を2ヶ所に描くもの(5)がある。2面に描く例で両面が観察できるものでは、両面ともほぼ同趣の人面を描いており、両面とも同一人物の手によるものと思えられる。顔の輪郭を描く例は少なく、9・19は耳以下の輪郭を11は全体の輪郭を表す。頭髪を表す例も少なく、11・18の2例しかない。眉の表現は、一本の横線で表現するものが圧倒的に多い。墨線を数本組み合わせる例(2・11・14・20・24)も少数ある。目の輪郭は、一筆で丸く表現する例(2・13・20・24)、一本の横線だけで表現するもの(4)、二筆で表現するものがある。二筆で表現する例では、横線を連結して輪郭を示すもの(1・10・12・18・23)と独立した2本の線で表現するもの(3・7・8・17・25~27)がある。目玉は点もしくは短線で表現する例が多くを占めるが、二筆で目の輪郭を表現するものには省略される場合もある。鼻は二筆ないし三筆で下側面を丸く左右対称に表現する例が圧倒的に多いが、ボタン状の貼り付け粘土片や把手を鼻にみたてたもの(9)、逆「T」字形に表現した例(23)、一本の縦線で表現する例(4)、弧線を数本組み合わせる例(20)等がある。口の表現についてはさまざまであり類別しないが、2・24のように歯を表現する珍しい例もある。口ひげ、あごひげ、ほほひげをすべて表現する例は少ない。みけん部にほくろあるいは白毫状の点を存する例(6)もある。顔の表現とは直接関係ないが、口縁部内面や胴部内面に接続する弧線(14)や縦棒(11)を描く例がある。後者については、人面を描く際の割り付け線の可能性もある。

壺Bの形態と人面の表現法、表情とは、例えば8と19のように対応関係が認められるが、全容を知れる例が少なく今後の課題としておこう。

棒線や弧線を組み合わせた文様をもつ例は、10個体程あるが、壺Bは2例(31・40)しかなく、他はすべて壺Cに描かれたものである。墨線で文様を表した例には口縁部内面や胴部内面に連続する弧線や縦線を描く例(28・30)もある。

(ii) 小型模造土器 (fig.19・P L.10)

西側溝 S D920の主として第2・第3層から小型模造土器が出土した。須恵器は、壺蓋の1例だけで他はすべて土師器である。甑・瓦・竈・高杯・横瓶・壺等の器種があり、すべて粘土紐巻き上げ成形によるもので手捏製のものはない。

甑は総数31個体あり、次の4型式に分類できるが、型式と層位とは、整合する関係にないので一括して記述する。

第I型式(16・17) 実用の甑を忠実に小型化した形で、円形に穿孔した底部と外傾度の小さい体部からなる。底部を焼成前にヘラで穿孔し、体部の相対する位置に上向きの把手を貼り付けている。7個体出土。16は胴部内面を横位のハケメで調整したのち、口辺部内外面をヨコナデで、体部内面下半をナデで調整する。17は、体部内面をナデで調整する。

第II型式(14) 口径8.5cm、器高7cm程で、丸底と外傾する体部からなる。完形品がないため底部の穿孔、把手の有無については定かでないが、14の例では少なくとも焼成前の穿孔はない。

第III型式(15) 口径10cm、器高6cm程で尖底に近い底部と急激に外傾する体部からなる。把手を持たず底部を穿孔した例はない。口辺部内外面と体部内面をナデで調整する。2個体出土。

第IV型式(1～8) III型式をさらに小型化した形態で、法量により更に細分できる余地もある。8個体出土。体部内面にハケメを施す例(5)は少なく、多くは体部内面をナデで調整する。

甕には、第IV型式の甑に組み合う小型品(9～13)と第I型式の甑と組み合うと思われるもの(18)がある。前者には、肩が張り口径に較べ器高が低いもの(9・10・13)と丸みのない長胴タイプのもの(14・15)がある。いずれも外反する短い口縁部をもつ。胴部内面をヨコナデ調整するものが大半を占めるが、ハケメを施した例もある。30個体出土した。後者は、球形の体部と外反する短い口縁部からなる。胴部内面は横方向の削りを施す。18と同形態のものは2個体しかなく、また、18と同様な形態で、II・III型式に組み合うと考えられる小型品はない。おそらく、I・II・III型式甑に組み合うものは、前述した人面土器の項で壺Cとして分類した1群(28～39)が使われたのであろう。

竈は総数40個体出土した。やはり甑に対応して3型式に分類できる。

第I型式(19) 完存する例はないが、比較的大型で実用品を忠実に模す。体部内面はナデで調整、口縁部周辺をヨコナデする。廂は粘土帯を貼り付け、丁寧にナデ調整する。14個体出土。

第II型式(20) 形態や調整面ではI型式と同じであるが、幾分小型になる。3個体出土。

第III型式(23～25) 口径5cm、器高4cm程の大きさで廂が矮少化し、調整も雑になり、粘土紐を押しつけたままナデ調整を行わない例(23)もある。内面をナデで調整する。6個体出土。

横瓶(27)は、須恵器のそれを忠実に模倣したもの。製作技法まで須恵器のそれを模しており、まず平底筒状の体部を作り、体部の一側面に穿孔し、口を付す。その後に、体部上位の開口部を粘土板でふさいで成形している。2個体出土。

高杯は、すべて破片で、杯部・脚部合わせて6片出土した。脚柱部を面取りせず、裾部が狭いもの(22)と8～9世紀の高杯に普通一般に見られる脚柱部を多面体に面取りするものがある。21は杯部片であり、内面はナデで調整するが、外面は調整せず粘土紐の痕跡をとどめる。

須恵器の蓋(26)は、平坦な頂部と直角に近い角度で折れ曲る縁部からなる。口径2.8cm、器高1.7cmで、頂部には自然釉が降着する。類例には、坂田寺金堂基壇から出土した双耳瓶の蓋がある。鎮壇具として使用された例であり、本品と同様に愛知県猿投山古窯で生産されたものである。

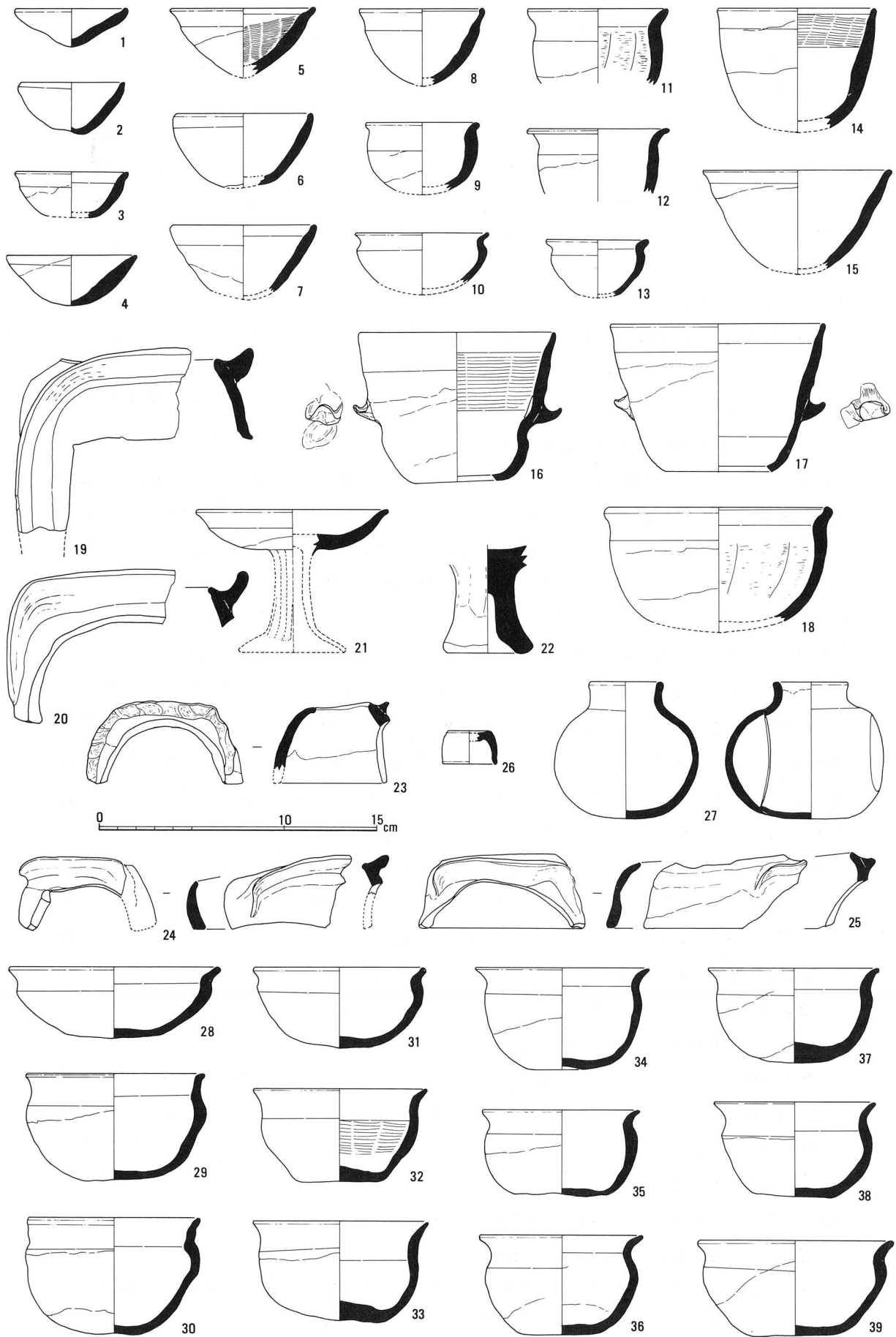


fig.19 小型模型土器実測図

(iii) 土馬 (fig.20・P L.12)

土馬は、全形をとどめる例はなく、すべて破片で総数142点(80個体以上)が出土。土取穴出土の1点を除き、すべて西側溝の堆積土から出土した。出土範囲は西側溝の全体にわたり散在的に出土した。西側溝出土土馬は、8世紀初頭から9世紀前半までの時期のものを含み、大きく7型式に分類できる。

(第I型式…7・10・12) 頸部に較べ頭部が小さく、顔の側面形は頭部上位がやや立ち上がるが、全体的に反りがない。口は明瞭

型式 \ 層位	第1層	第2層	第3層	第4層	層位不明	計
I			5	1		6
II			1			1
III		3	8			11
IV		2	8			10
V		3	10			11
VI		3	4			7
VII	2					2
不明	3	8	69	4	7	91
計	5	19	105	5	7	141

tab 4 西側溝出土土馬型式別点数

な面をなさず、顎と頸部との区別がない。目・

tab. 4 西側溝出土土馬型式別点数

鼻は竹管を押し付けて表現する。また鼻は、篋を押し付けて表現した例(10)もある。胴の横断面は蒲鉾形～隅丸長方形を呈し、背には粘土をつまみ出して作った鞍をもつ。尾は下を向き、前肢・後肢の開きは少なくV字形を呈する。第I型式の土馬は、いくつかの破片の観察から製作手順を以下のように復原できる。まず粘土を棒状に作り胴部から尾部を作り、四肢の付く位置を小さくつまみ出したり、凹めたりして、その位置に別に作った肢を接合する。次に別に作った頸部を胴体に接合し、粘土を延ばしてたてがみを表現する。次に粘土小片を貼り付けたずなを作り、さらに粘土円板を折り曲げたものを頸部先端に被せ顔を表現する。後述するIV型式までの土馬も同様な手順で製作されている。

(第II型式…6・13) 頭部は長くなり、顔の側面形が大きく湾曲するようになる。下顎と頸部を明瞭に区別し、口を平坦な面で表現する。目と鼻は竹管を押し付けて表現する。胴は比較的分厚く隅丸長方形を呈し、背には強いナデで凹部を作り鞍を表現する例(13)と鞍の表現のない例(6)がある。尾は下降し、前肢、後肢の開きが大きくなり、丸味を有するV字形を呈するようになる。

(第III型式…11・13) II型式に近い形態をとるが、全体的に大きくなり、顔の反りが一段と大きくなる。頭部先端を指で押えて小さな面を作る例も出現する。胴の横断面は蒲鉾形を呈し、背にはナデで凹部を作り鞍を表現する。尾は、ほぼ水平に延び先端が上を向く。土馬としては、この型式が最も洗練された形態であり、後述する以下の型式は次第に退化傾向を示す。

(第IV型式…6) 全体的に小型化し、顔が大きいわりに頸部が短かく、四肢が太くなる。たてがみの表現も顕著でなくなる。鼻や鞍を表現する例は少なくなり、尾は斜め上方に反り上る。

(第V型式…1・4) 大きさや形態的にはIV型式とほとんど変りがないが、前述の型式の土馬とはまったく異なる手順で作られている。すなわち、平面形が円形もしくは楕円形を呈する粘土板から直接頸部・尾部・四肢をつまみ出し、次に適当な形に内側に折り返し、折り返した面(腹部から尾部)をナデで調整する。そのため胴部横断面は例外なく腹部面がくぼみ、尾は扁平な形になる。頸部・四肢をナデで調整した後、たずなや顔を貼り付けている。

(第VI型式…5・8) 全体的な形や製作手順はV型式に通ずるものがあるが、更に小型化の傾向を示し、調整も雑になる。頸部・四肢・尾部をひねり出す粘土板が次第に薄くなり、折り返したまま調整しないため全体的にやせた感じになり、たずなの表現も痕跡程度のものになる。

(第VII型式…2・3) 更に小型化と調整の簡略化が進行し、たずなの表現もなくなる。

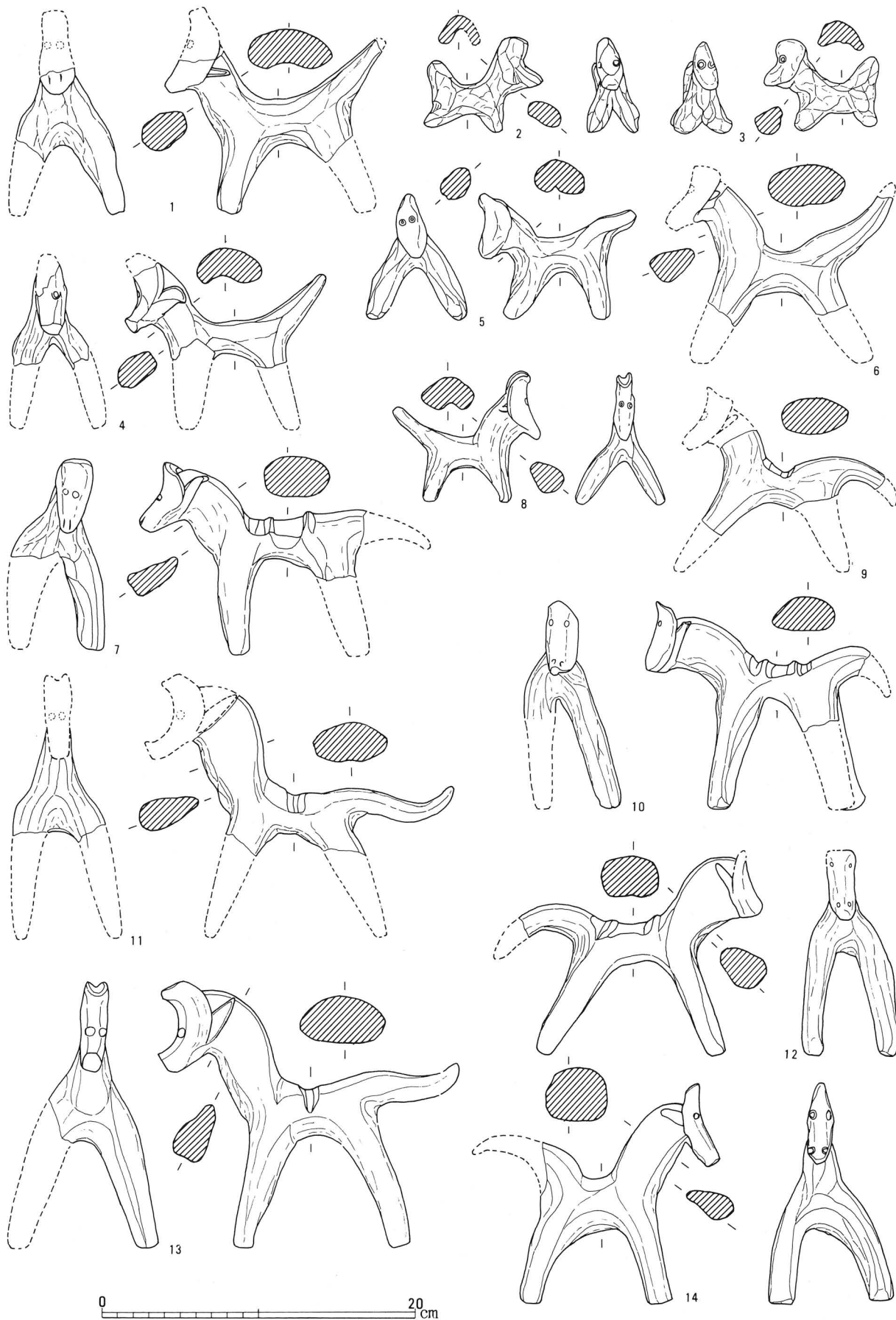


fig.20 土馬実測図

型式と層位は、tab. - 4 のようになり、必ずしも整合する関係にない。次に各型式の年代について若干付言する。Ⅰ型式は、平城京左京1条3坊15坪で検出した8世紀初頭の溝S D485から出土したものと同型式であり、Ⅲ型式は平城京左京4条4坊11坪の土壌S K2412や西市の井戸S E395出土のものと同型式であり、これらは天平年間の土器を伴出している。Ⅴ型式は平城宮馬寮域にある溝から出土し、奈良末の土器類を伴出している。またⅦ型式は東3坊大路東側溝出土例では9世紀前半代の土器を伴出している。以上のような点から、前述の型式はⅠ～Ⅶの順で展開を遂げたと言えよう。

(iv) 陶硯 (fig.21)

陶硯は西側溝第1層から1点(5)、第2層から2点(1)、第3層から6点(4・6～8)、第4層から1点、遺物包含層から1点(2)、総数11点が出土した。いずれも破片であり、出土土器の全体量からみれば微々たる量にすぎない。しかし、杯B・杯B蓋・壺・甕の胴部を硯として使用した例が、約200点あり、普通一般には、こうした転用硯が使用されていたことが分る。転用硯の多くは黒墨をすったものであるが、朱墨をすった例も7点あり注目される。

出土した陶硯には、蹄脚硯5点、圈足円面硯5点、獸足円面硯1点の3種がある。蹄脚硯には、硯部と台部とを別々に作って両者を多数の足で結合させる型式のもの一蹄脚硯A(6)と硯部と脚部を連続的に成形し、台部下部に粘土を分厚く巻いて基底を安定させた後、逆三角形のえぐりを入れ、三角柱状の脚柱を作り出す型式のもの一蹄脚硯B(7)がある。前者は、黒灰色を呈し、外堤部が極端に分厚い。外堤部外面の口唇部近くに1条の浅い沈線を下半部には1条の突線をもつ。脚部を欠損するが透しの数は26個に復原できる。後者は、灰白色を呈し、全体的に薄く作られている。外堤部外面下半に2条の突帯を施し、透しの数は24個に復原できる。

圈足円面硯(1)は、硯部を欠損するが、圈足部に縦長の長方形透しを8個配し、透しと透しの間には人面風のヘラ描き文様を施す。2は圈足部を欠損するが、硯部が外堤より高い。3は硯部を欠損するが、圈足部下半に突帯を付す珍しい例。4は、底径10.4cmを測る小型硯で圈足部6個の長方形透しと透しの間に格子状のヘラ描き文様を施す。獸足円面圈(8)は、外堤部下端の内外両面を挟む形で粘土塊を取り付け、ヘラで獸足風にケズリ出したもので圈足部下端外面の径は約20cmを測る。

(v) 施釉陶器 施釉陶器類も極めて少なく次に述べる5点しか出土していない。西側溝の第3層からは、還元され銀化しているため二彩か三彩の区別はつかないが奈良三彩の破片が2点出土した。1点は長頸瓶、他は小壺である。また西側溝の最後の堆積である第1層から黒笹14号様式の灰釉椀片が、西側溝を埋立てた赤褐粘土中から黒笹90号窯式の灰釉陶器片と軟陶緑釉の花瓶片とが出土しており、西側溝の存続時期を知る手掛りとなる。

(vi) 土製円板・紡錘車・土錘 (fig.32・PL.12)

直径3cm未満・厚さ5～7mm程度の小円板2点(3・4)が、床土下の暗青灰粘土層から出土した。いずれも土師器片を利用したもので全面をすって成形している。暗青灰粘土は奈良時代から江戸時代までの遺物を含んでいるため、その時代については特定できない。

紡錘車は、西側溝の第2層から1点(5)、第3層から3点(7～8)、第4層から1点(6)出土した。いずれも土師器片を円板形に加工したものである。5は土師器の甕の胴部片を加工したものの。6・9は土師器の杯あるいは皿片を加工したもので、穿孔は上下両面から行っている。9は格子状の

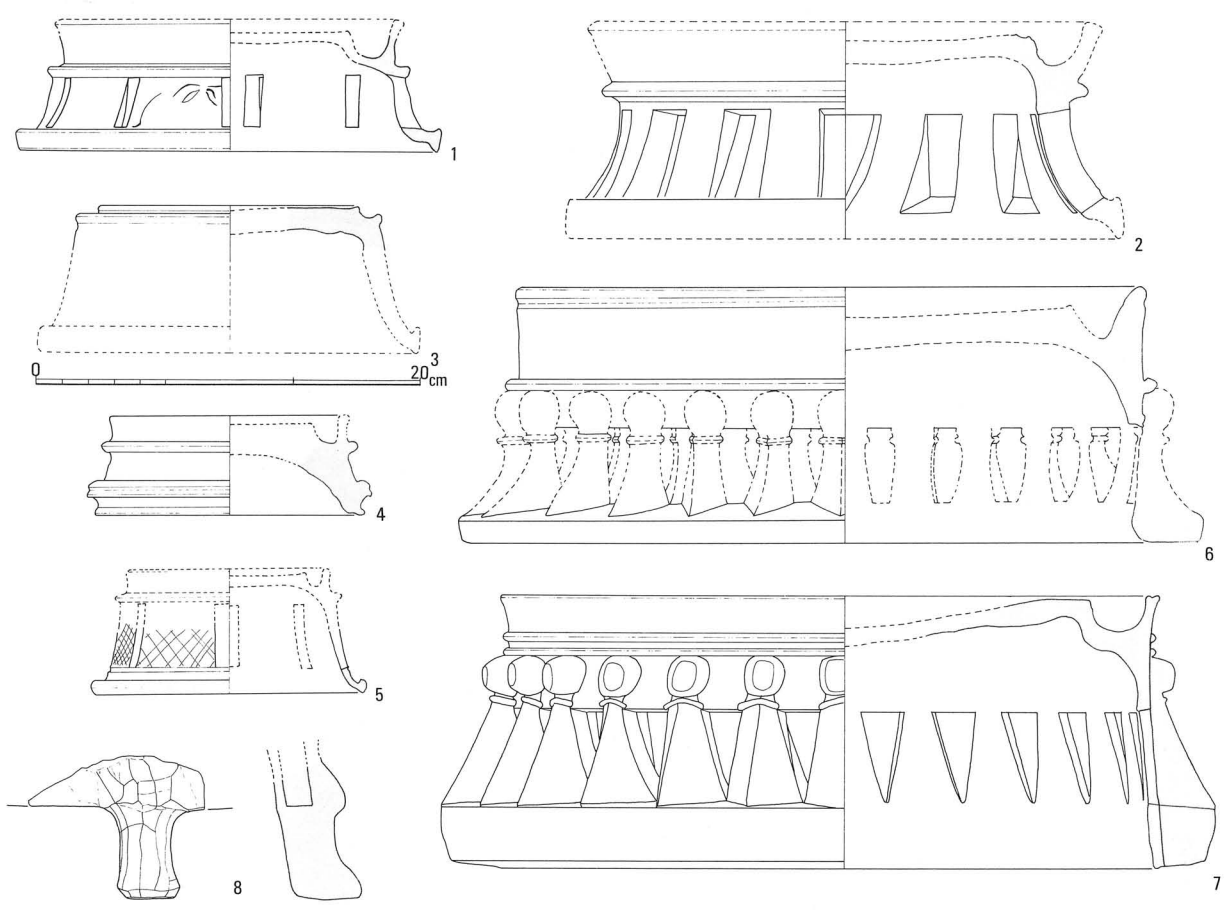


fig.21 陶硯実測図

ヘラ描き文をもつが、円板製作時に施したものでなく、本来の器に焼成後に線刻されていたものである。いずれも周縁部をうち欠いたまま調整せず未製品の可能性もある。

7は須恵器の甕の胴部片を円板状に打ち欠き、片面から穿孔しかけた未製品である。8も須恵器の杯あるいは皿片を円板に近い形に荒く打ち欠いたままで調整を加えていない未製品である。

土錘は西側溝第1層と第3層から各1点ずつ出土した。いずれも土師質で棒状品に粘土を巻き付け訪錘状に成形したもの。

(vii) 用途不明土製品 (PL.12)

11は丸瓦を半載したような形態で凸面に格子状のヘラ描き沈線文を施し、その後さらに突き刺し列点文を配したもの。須恵質で側端面・上端面を鋭削りで、凸面凹面はナデで調整する。内面には粘土紐痕跡をとどめる。西側溝第3層出土。厚さ2cm、残存最大長17cmを測る。10は側面形が分銅形を呈し、上端側面に円孔が穿れた土製品で、体部を欠損する。須恵質であるが焼きが甘く全面磨耗している。鞘壺上端部片の可能性もある。西側溝第1層出土。

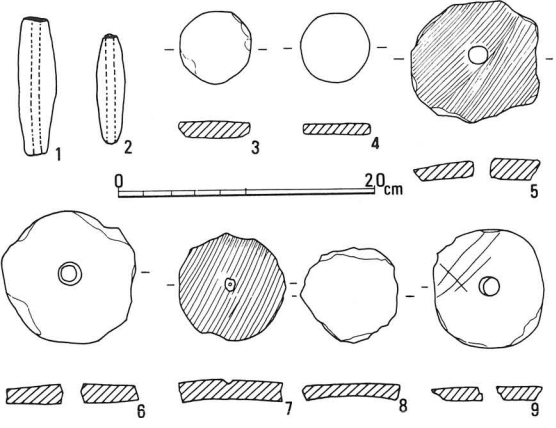


fig.22 土製円板・紡錘車・土錘実測図

C 墨書土器 (fig.23・24, PL14. tab.5)

墨書土器は右京8条1坊々間大路の西側溝S D920・井戸S E930から計615点出土し、そのうち土師器が144点、須恵器が471点となっている。以下、墨書土器のうち注目されるものを選んで、それぞれ若干の注釈をつけておくこととしたい。特に記述のないものは、S D920出土である。

政所(1) 政所は官司・貴族等の家・寺院等の政務を執る事務機関で、正倉院文書に多数散見するが、平城宮内から出土した墨書土器には政所はみえない。この墨書土器の政所もこれらの類の機関であろうか。所属する官司・貴族等についてはわからない。

余戸郷／道□□部／鴨□万呂(90) 郷名と人名とを記したもの。倭名抄によれば、京付近の余戸郷としては、大和国葛上郡、山城国宇治郡・綴喜郡、河内国石川郡・若江郡・渋川郡などにみえる。

□□／九々八十一／□(8) 土器に九九を記した例は他に例をみないが、木簡・漆紙等にはしばしばみられる。九九を記した木簡の例は、平城宮S D3154(平城宮木簡Ⅱ-2730号)・平城宮S D5788(概報6)・平城宮S D3236-C(概報12)・藤原宮S D170(木簡番号666)がある。また、漆紙では宮城県下窪遺跡で出土したものがある。

□／大田部人足一(外面) 額田一(内面)(37) 内外面の筆は異筆、大田部人足の人名は他の史料にはみえない。大田部氏は陸奥・相模・下野・常陸・下総等に分布している。額田もあるいは氏姓か。額田は京近辺では額田宿禰が大和国平群郡8条3里26坪にその祖の墓をもっていたことが額安寺班田図から知られる。

南家(17・78) 墨書土器中にみえる南家・東家などの用語は多く、ある区画、たとえば駅家・郡家などの一区画の中で家屋の方位による位置関係から生じた名称のように思われる。類例としては静岡県袋井市坂尻遺跡からは東家と記したものの2点、平城京東3坊大路の東側溝から中家(1点)、また石川県寺家遺跡から中家(1点)などがある。もっとも、藤原氏の北家・南家は家の位置関係を示しているの、同一区画の中での呼称ではない例もある。



fig.23 墨画土器実測図

林(7・10・11・16・18・23・28・32・67・71・79・89)

計12点あって、おそらく林は氏の名を記したものと思われるが、右京計帳の8条1坊の分には林氏はみえない。姓氏録には左京の諸蕃に林連がみえるが、この林の墨書土器とは関連不明。林の文字の下に○印や上に合点をほどこしたもの、林神と記したのものがあるのは、林の氏の集団内部での土器の帰属関係を示すものか。このように氏の名前を記した墨書土器が多数出土したのは、平城宮・京跡内の発掘調査でも現在では他に例がない。その集中的な出土状況から、林氏の住居が右京8条1坊11坪近辺に存在した可能性が極めて高いと言えよう。

桑(21・35) これも林と同じく氏の名を記したものである可能性がある。桑のつく氏としては、桑内・桑原などが考えられ、前者は桑内連乙虫女か左京人として続日本紀神護景雲二年十月条にみえ、また桑内真公は左京8条4坊に家一区

をもっていた(大日古-6-427)。また左京8条3坊から桑内と記した墨書土器が出土している。後者は桑原連真島が左京人として続日本紀の天平神護2年2月の条にみえる。

大宅(25・80) 同じく氏の名前であろう。大宅氏は姓氏録左京皇別にみえ、右京人として大宅廣麻呂が続日本紀神龜三年正月に、また右京3条4坊に本貫をもつものとして大宅岡田臣虫麻呂、同戸口人上(大日本古25-92)、右京に本貫をおくものとして大宅岡田臣末足(大日本古24-554)、がみえる。また左京については左京8条3坊戸主として大宅首童(大日古6-567)子がみえ、同坊に板屋五間をもっていたことが知られる。大宅氏は春日氏と同祖で、添下郡に古くから根拠地をもつ氏族で、おそらく、これらの大宅氏は平城京造営にともなって京内に編附されたものであろうか。

民使(4) 氏の名を記したもので、民使は大和の檜隈を出身とする渡来系氏族。西市員外令史に民使毗登日理が続日本紀宝龜元年三月にみえる。

右京(54) 行政区画としての右京を土器に記すことは不自然であり、あるいは右京職に属す土器として註記したものかも知れない。

壹月女(27)、□年女(68・73)、七女(34)、真刀自(49)、御女□(24)、いずれも女性の名を記したもの。

(呪符) 土師器の蓋内外両面に呪符を墨書したもの(fig. 24)。文字としては、「急々」・「々如律令」・「□申/大將軍」などがみえる。前二者は「急々如律令」の一部。奈良時代の例で土器に呪符が記されたものとしては初出例である。S E 930出土。8世紀にみられる呪符の例は、静岡県浜松市伊場遺跡から出土した木簡2例があるが、今回出土したものは、特に符籙を明確に記している点では注目される。7世紀の例としては、藤原京本薬師寺の西南隅の発掘調査で本薬師寺に南面する大路の北側溝から出土した木簡がある²。呪符としては最古の例で、この例は符籙を一面に、他面に呪語と文字とを記しているようにみえるが、文字は判読できない。今回出土した呪符ならびに上述した例は、日本における道教的呪符の始源を語る史料として注目される。呪符は中国・朝鮮から伝来したもので、古くは漢代の鎮墓文・晋の「抱朴子」にみえるが、中国・朝鮮の呪符、特に呪籙をとまなう同時代の史料は、よくわかっていない。たまたま管見にはいたものとしては、スタイン収集の5775文書、ペリオ収集の2153文書にみえ、呪語・符籙をのせている。

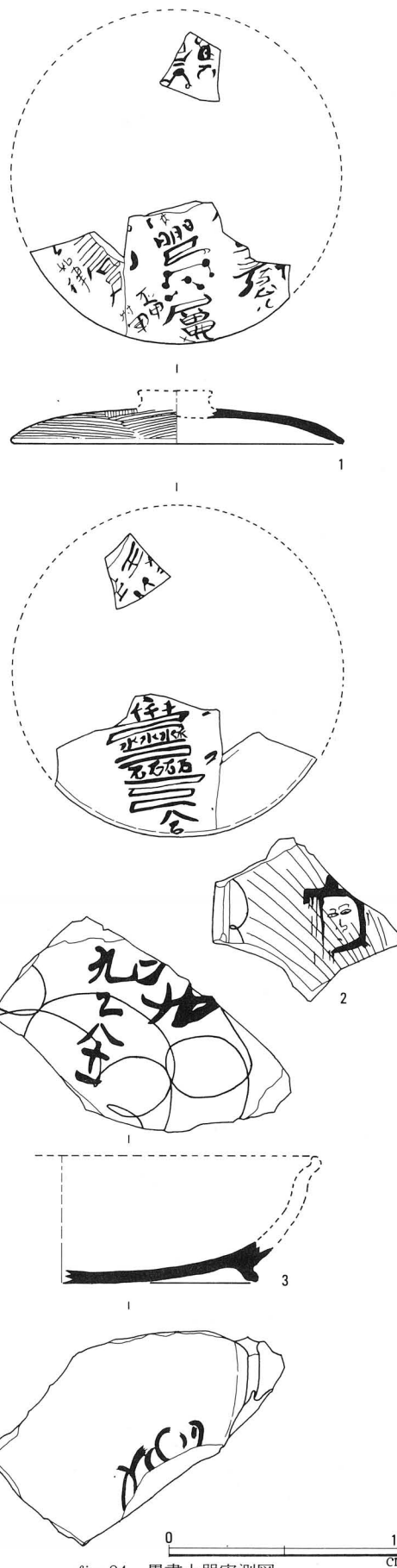


fig.24 墨書土器実測図

両書の年代については、書風からみて古いものではなく、隋～唐代のものかと思われる。

この他に鳥と馬を描いたもの (fig.23)、人面を描いた墨画がある (fig.24-2)。

今回の調査で出土した墨書土器は、平城宮内から出土するそれとは性格を異にしている。宮出土の墨書土器は官司名・人名・物品名・氏名・習書等であって、林の例にみるような同一氏の多数の墨書土器がまとまって出土した例はない。このような例は、むしろ集落跡から出土する墨書土器の場合にまみられるものである。また右京の墨書土器は西側溝が西市に近い堀川であったことと関連するのであろうか、その点では西と記された二点の墨書土器の存在も注目される。

註1 浜松市教育委員会『伊場木簡』1976年

2 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』1976年

番号	墨書内容	器種	記載場所	番号	墨書内容	器種	記載場所
1	政所	高杯	裾内	46	船木□柴/凡	壺	底外
2	定	"	脚柱外	47	土	杯B	"
3	千	皿A	底外	48	王	"	"
4	民使	—	—	49	真刀白	杯B蓋	頂外
5	上	杯か皿	底外	50	家	"	"
6	尔	杯C	"	51	水	杯B	底外
7	林□	杯か皿	"	52	里	—	外面
8	□□/九々八十一/□	杯B	"	53	乎賣	杯か皿	底外
9	天	杯A	口外	54	右京	杯B蓋	頂外
10	林○	杯か皿	底外	55	千	杯A	底外
11	杯	"	"	56	伊都器	杯B	"
12	上	杯A	"	57	連	杯B蓋	頂外
13	平	杯か皿	"	58	十	杯B	底外
14	今人	"	"	59	一	杯B蓋	頂外
15	連	"	"	60	井	杯	底外
16	林神	"	"	61	"	"	"
17	南家	杯B	"	62	"	壺蓋	頂内
18	林	杯か皿	"	63	尔	杯B蓋	頂外
19	大□	皿A	口外	64	□□/吉	"	頂内
20	友	杯B蓋	頂外	65	大	杯	口外
21	桑	"	"	66	美	杯B蓋	頂外
22	器	"	つまみ	67	林□	杯B	底外
23	林	"	頂内	68	□年女	"	"
24	御女□	杯B	底外	69	行	杯A	"
25	大□〔宅カ〕	"	"	70	目カ	杯	"
26	俵	杯	"	71	林	杯か皿	"
27	(外)壹月女(内)□付/□	杯A	"	72	國刀	杯B蓋	頂外
28	林○	杯B	"	73	年女	杯か皿	底外
29	柴	杯B蓋	頂内	74	東□	杯B蓋	頂内
30	(外)□女(内)七□	皿E	底外	75	忍	"	頂外
31	大	杯B蓋	頂外	76	林□	"	"
32	林	"	頂内	77	魚	杯A	底外
33	皆	杯か皿	底外	78	南家	杯B蓋	頂外
34	(外)七女□(内)七	杯B蓋	頂内外	79	林	壺E	底外
35	桑	杯か皿	底外	80	大宅	杯B	"
36	白万呂	杯B蓋	底外	81	魚	杯B蓋	頂外
37	(外)□/大田部人口	"	頂内外	82	真	"	"
38	(内)額田	"	底外	83	黒カ	杯	底外
39	大	"	"	84	□守八□	甕	胴内
40	麿	"	"	85	田	杯B蓋	頂内
41	西	"	"	86	器	杯	底外
42	三升	壺	"	87	皆	杯	底外
43	壹	杯B蓋	"	88	皇/□	杯	底外
44	西	杯	"	89	林	杯A	底外
45	貴	壺	"	90	余戸郷/道□□部 /鴨□万呂	壺K	底外

tab 5 西側溝出土墨書土器一覧 (1~19土器、他は須恵器、/は改行を示す)

D. 瓦 類 (fig.25・26)

大量の瓦類のほとんどは西1坊々間大路西側溝S D920から出土した。内訳は丸・平瓦が圧倒的に多く、ついで軒丸瓦23点、軒平瓦16点、鬼瓦2点、熨斗瓦2点、面戸瓦1点、異形瓦製品1点である。

軒丸瓦 既に知られている11型式¹12種のほか、新形式が2種類ある。

6012Aは中央に珠点をもつ三重圏文で、第3圏線が外縁に近接し、第1・第2圏線の間隔が第2・第3圏線のそれより広い。瓦当裏面下半から丸瓦接合位置に至るまで布目が残る。平城京左京1条3坊15・16坪、同3条2坊7坪、羅城門地域に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老5年～天平17年）（以下、「平城宮軒瓦編年」を省略する）。溝S D920から²1点出土。

6135Aは小型の中房に蓮子を1+6配した単弁12弁蓮華文である。平城宮内裏東方官衙地区から多く出土し、平城京左京2条2坊12坪、同8条3坊10・15坪、東2坊坊間大路、西大寺、法隆寺に同范例がある。第Ⅱ期。溝S D920から1点出土。

6138Bは単弁12弁蓮華文で、内区が外区より1段高い。平城宮のほか、平城京左京1条3坊15・16坪、東3坊大路、法華寺阿弥陀浄土院、山城音如ヶ谷瓦窯に同范例がある。第Ⅳ期（天平宝字元年～神護景雲年間）。溝S D920から3点出土。

6225Aは複弁8弁蓮華文で、中房が大きい。平城宮第二次朝堂院地区から多く出土し、平城京左京2条2坊12～14坪、同3条2坊7坪、同5条2坊14坪、同8条3坊10・15坪、同9条3坊10・11坪、東3坊大路、朱雀大路、西隆寺に同范例がある。第Ⅲ期（天平17～天平勝宝年間）。溝S D920から1点出土。

6291Cは複弁8弁蓮華文である。従来6308Fとしていたが、間弁が弁の周囲をめぐるので、6291に編入した。大和押熊瓦窯に同范例がある。第Ⅱ期。溝S D920から1点出土。

6301Cは複弁8弁蓮華文で、中房に蓮子を1+5+10配す。興福寺式軒丸瓦の一つ。平城宮のほか平城京左京1条3坊15・16坪、同2条2坊12坪、同8条3坊9・15・16坪、東3坊大路、西1坊大路に同范例がある。第Ⅱ期。溝S D920から2点出土。

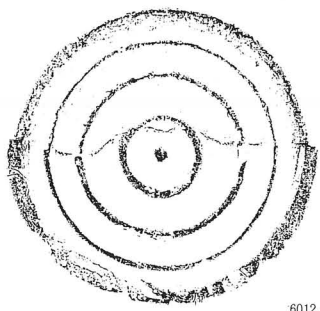
6316Daは複弁9弁蓮華文で、弁子葉2本を分離する弁中央の線がない。また、間弁がめぐって複弁を形作る。蓮子は当初1+4（Da）で、1+8（Db）に彫り直す。平城宮のほか、平城京羅城門地域、西隆寺、元興寺に同范例がある。第Ⅲ期。溝S D920から1点出土。

6316KはDに近似するが、Dの中房が弁区上り一段高いのに対し、Kは一段低く、弁形が不揃いである。平城宮に同范例がある。第Ⅲ期。溝S D920から1点出土。

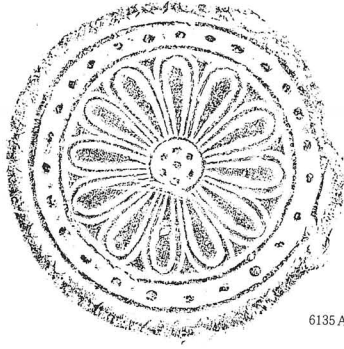
6320Abは複弁12弁蓮華文で、弁が細く間弁を欠く。当初外区外縁が線鋸歯文であったもの（Aa）を、凸鋸歯文に彫り直した。平城宮のほか、平城京左京3条2坊9坪、東3坊大路、法華寺阿弥陀浄土院に同范例がある。第Ⅳ期。11坪の東を画す築地塀想定位置の包含層から1点出土。

6348Aは複弁7弁蓮華文で、外区内縁に唐草文、外縁に線鋸歯文をめぐる。平城宮における出土はまれで、平城京城に多い。左京1条3坊15・16坪、同3条1坊15坪、同3条2坊6坪、同4条2坊1・3坪、同5条3坊13坪、同8条3坊10・15坪、東3条大路、右京6条4坊7・10坪、法華寺、薬師寺、法隆寺東院に同范例がある。第Ⅱ期にあてられているが、内区文様が藤原宮式6279に近似するので第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）にさかのぼる可能性もある。溝S D920から1点出土。

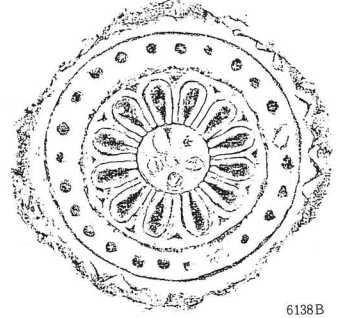
新形式1は複弁8弁蓮華文で、断面がわずかに凸レンズ状にふくらむ中房に蓮子を1+4配す。大



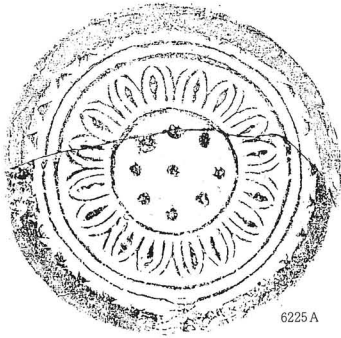
6012A



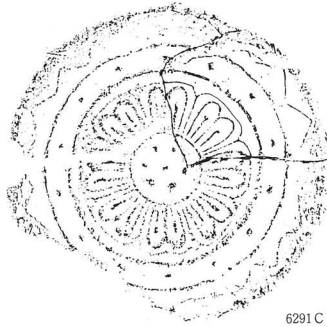
6135A



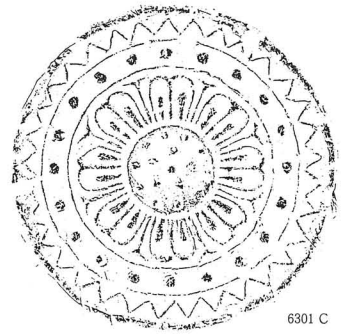
6138B



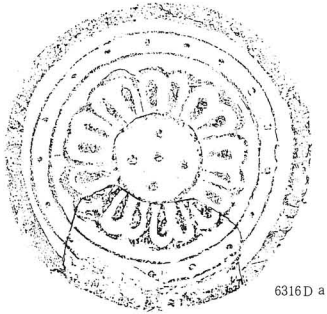
6225A



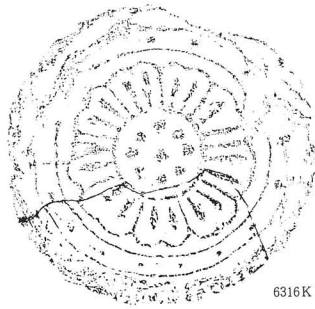
6291C



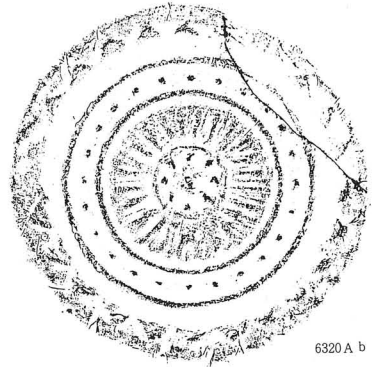
6301C



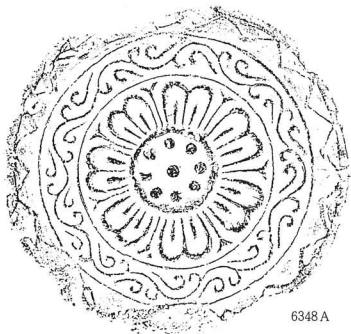
6316D a



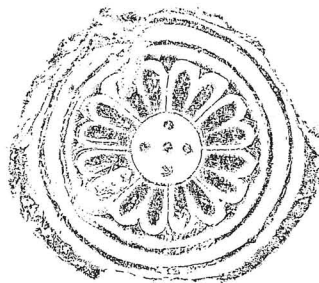
6316K



6320A b



6348A



1

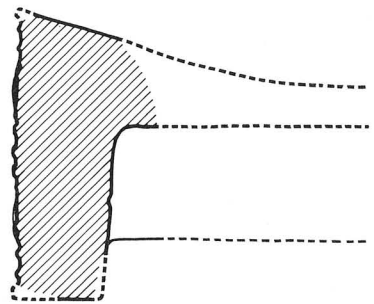


fig.25 軒丸瓦

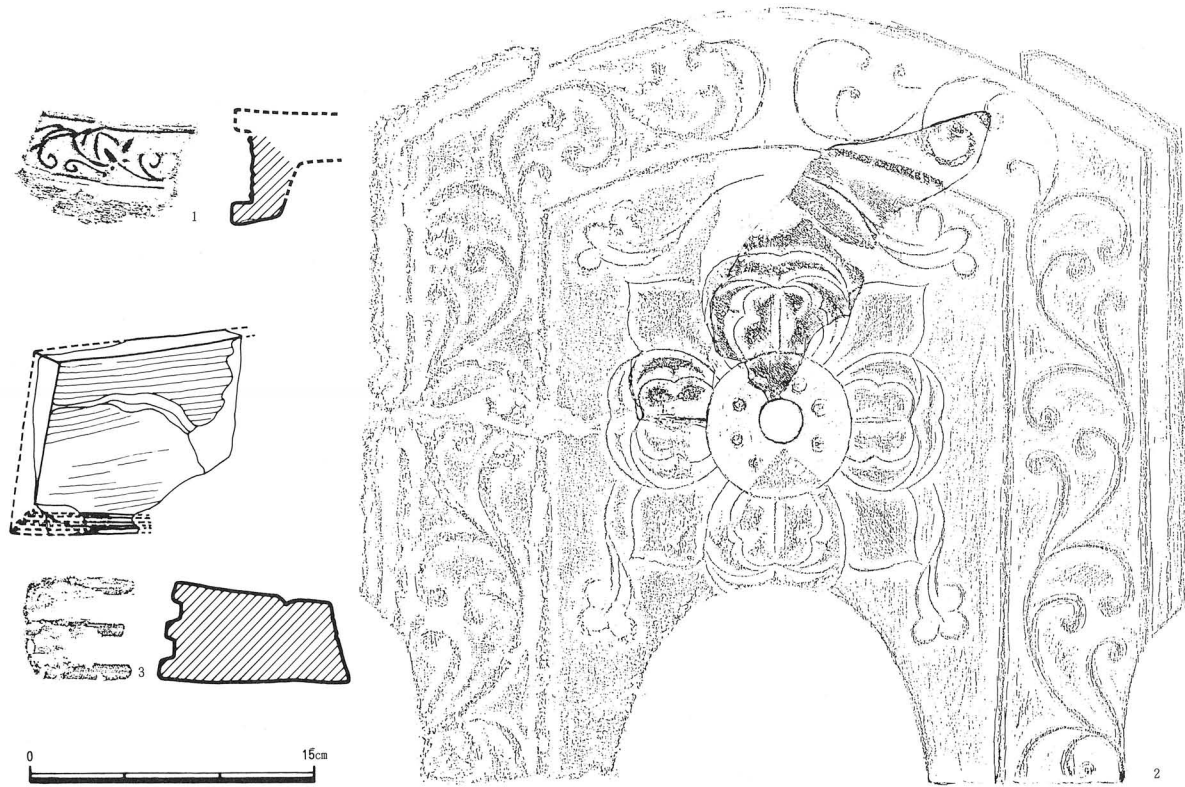
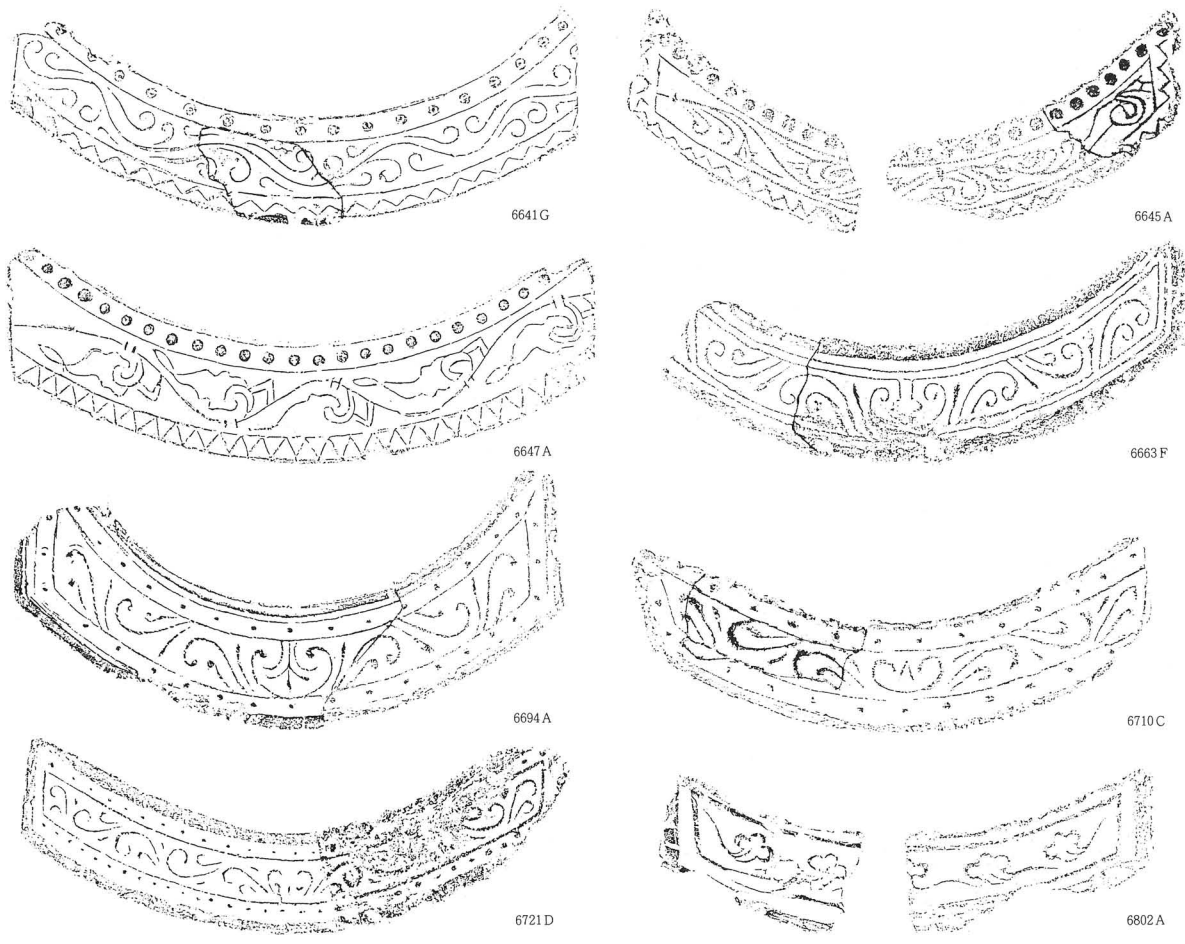


fig.26 軒平瓦・鬼瓦・異形瓦製品

きく低い子葉を分割する線はなく、間弁は外区界線基部にむかってなだらかに傾斜する。外区に二重圏線をめぐらす。丸瓦凹面から瓦当裏面まで布目が連続する。平城宮においては出土例がなく、長岡京にある。溝S D920第3層から出土したため、奈良時代末か平安時代初頭か決めがたい。ほかに西1坊々間大路S F910路面を被う遺物包含層からも1点出土。なお胎土は、後述する軒平瓦6802Aや鬼瓦と共通し、おそらく6802Aと組み合わせるのであろう。

新形式2は中房を欠いた小片である。細い単弁で、弁の輪郭線は細く、子葉が高く突出する。間弁は弁をかこまない。内・外区の界線は1重で、内側にわずかに傾斜した広い外縁に面違鋸歯文を配す。大和横井廃寺に類似品がある。溝S D920から1点出土。

軒平瓦 9型式9種のほか、中世の資料が1点ある。

6641Gは右偏行唐草文で、上外区に珠文、下外区・脇区に線鋸歯文を配す。唐草と逆方向の小支葉がある。薬師寺創建瓦で平城京右京6条3坊4坪に同範例がある。第I期。溝S D920から1点出土。

6645Aは右偏行変形忍冬唐草文で、上外区が珠文、下外区・脇区が線鋸歯文。興福寺、久米寺に同範例がある。第I期であろう。溝S D920から1点出土。

6647Aは左偏行変形忍冬唐草文で、上外区・下外区に珠文を配す。藤原宮式で平城宮でも出土する。第I期。溝S D920から2点出土。

6663Fは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。唐草は界線から発し、第3単位主葉・支葉が脇区界線に接しない。平城宮のほか、平城京左京3条2坊6坪、同5条3坊11坪、東3坊大路に同範例がある。第III期。溝S D0920から1点出土。

6694Aは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。平城宮、平城京左京3条2坊7坪、9条大路、唐招提寺、薬師寺に同範例がある。第III期。溝S D920から4点、包含層から1点出土。

6710Cは3回反転均整唐草文で、外区に珠文帯をめぐらす。平城宮のほか、平城京左京3条2坊10・15坪、朱雀大路、西隆寺に同範例がある。第III期。溝S D920から1点出土。

6721Dは5回反転均整唐草文で、外区に珠文帯がめぐる。平城宮大膳職・東院地区に多く、右京2条2坊14坪、東3坊大路、山城岡田池瓦窯に同範例がある。第III期。溝S D920から1点出土。

6802Aは飛雲文で、外区に界線を一条めぐらす。東3坊大路、唐招提寺、長岡宮に同範例がある。奈良時代末ないし平安時代初頭頃に比定できよう。溝S D920、遺物包含層から各1点出土。

1は均整唐草文で、外区に一重界線をめぐらす。花文をともなうこと、周縁が高く突出すること、浅顎の接合法から13世紀中頃に位置づけできる。溝S D920を覆う遺物包含層から1点出土。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁が付く。凸面を格子叩きで調整した例は1点で、他は縄叩き調整。

平瓦の凸面に格子叩きを施した例は2点しかなく、他は縦位か横位の縄叩き。端面に「司」「田」の刻印をもつものが、溝S D920から1点ずつ出土した。

鬼瓦 蓮華文鬼瓦の小片で、左京8条2坊4坪から本例と同範とみられる資料が出土している。中房の中心に釘孔を穿ち周囲に蓮子を配す。宝相華風の蓮弁と先端が尖る間弁を弁間に配す。内区の4隅に6802Aと同類の飛雲文を配す。内区と外区を太い凸線で画し、外区に唐草文をめぐらす。6802Aと同時期とみられる。溝S D920から2点出土。

異形瓦製品 重弧文軒平瓦に似た瓦製品、薬師寺と9条大路に類例がある。溝S D920から出土。

註1 奈良国立文化財研究所が設定した型式番号

2 特別にことわらないかぎりS D920の第3層からの出土である。

3 奈良市教育委員会の発掘調査資料。鬼瓦も同じ。中井公氏に御教示いただいた。

4 常盤井智行「井手町岡田池瓦窯出土瓦」『京都考古』第31号1984年。

E 木 簡 (P L . 14)

木簡は西1坊々間大路西側溝S D 920から合計18点出土し、そのうち、判読可能なものは、以下の9点である。・は積文の表裏を示し、右端の数字は法量（長さ×幅×厚み）と木簡の型式番号¹を示す。

(1) 附下田坏廿口受鳥万呂 (189) × 15 × 4 6081

文書木簡の断片。田坏廿口を支給したときのもの。田坏は東大寺文書（大日古4-52.221）にみえる。

(2) ・廣□ □□

・小鯛 (53) × (24) × 3 6081

(3) ・□□□
・□□足

(50) × (21) × 3 6081

(4) 十□

(44) × (17) × 3 6081

以上の(2)～(4)の3点は文書木簡の断片で同筆・同材である。もともと同一木簡か。

(5) □ 布 春日部□□

6091

布等の支給伝票か。

(6) ・□□□□□□

・十一月廿日 (174) × (8) × 6 6081

(7) 黒万呂

155 × 18 × 5 6031

人名を記した付札、あるいは(8)と同じく米についていた付札か。貢進物の荷札ではないから黒万呂のもっていた米等の物品につけられていたものか。

(8) 千麻呂米□

(71) × 18 × 5 6039

千麻呂がもっていた米についていた付札

(9) □飛仏生常□□

(141) × 20 × 4 6081

これらの木簡のうち注目されるのは、千麻呂・黒麻呂という人名を記した付札で、このような例は平城宮では少ない²。おそらく千麻呂等の所有ないし管理する米を整理するために作成されたものと思われる。また貢進物荷札が一点も出土していないのも注意をひく。貢進物荷札は、貴族の宅地が建ち並んでいたと思われる三条のあたりまでが限度で、それ以南では東市付近（左京8条3坊）の調査で1点出土しているにすぎない。

註1 木簡の型式番号及び法量の表記法については奈良国立文化財研究所『平城宮木簡Ⅲ』参照。

2 平城宮内で出土した人名のみを記した付札は、S B 7802の柱抜き取り穴から出土したものがある。衛士の名前のみを記したもので、衛士の持っていた物品につけられていたものと考えられている。奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅸ』参照。

F 木 製 品 (fig.27~30・P L .15・16)

今回出土した木製品には各種のものがあり、その数もきわめて多い。そのほとんどのものは、S D 920から出土しており、集中することなく出土した。ここに収録したもののうち39はS E 930からの出土品である。数少ない遺物として、鉄身がついたままの錐や大小の刀子がある。

(i) 容器等厨房具

木皿 1は全面黒漆塗りの皿で、木地は針葉樹らしく、厚さ0.3cmの均一な作りである。漆はきわめて平滑に塗られており、下地に布着せはない。外面および底面は多少厚く塗られている。正倉院にはこれと同形でもうひと回り大きい皿がある。径15.5cm、高さ2.5cm。2はロクロ挽きの木皿で、全面に黒漆が塗られている。漆膜は薄く、塗りも粗雑で刷毛目が残る。内面と立ち上り部の外面にはロクロ挽きの条線がよく残っている。底面は刀削りで仕上げられ、中央の1個所と約3.5cm離れた四周の4個所に、ロクロ固定用の扁平な爪跡がある。底面には直線状の刃物痕が7~8条交叉している。

曲物 39は径20.6cmの底板に、高さ14.1cmの側板を7箇所木釘留めしたものである。側板内面には縦方向と斜方向のカキ目をつけている。側板の重複する部分に、6.5cmの間隔をおいた2個所で樺皮縫いをしている。側板の上端部には相対する1個所に幅0.6cm、深さ0.3cmのえぐり込みがある。内面全体に黒漆が付着しており、特に底から $\frac{3}{4}$ 付近には厚く付いている。また外面の数個所にも垂れこぼれがある。漆用容器として使用したらしい。側板上端のえぐり込みに棒をさし渡して、刷毛置きにしたのだろう。(S E 930出土)

蓋 5は蓋の断片で、周囲は斜めに切り落され法面となる。容器の落し蓋だろう。径10cm、厚さ1cm。

へら状品 7は厚さ0.3cmの板目材の片方をへら状に幅広くして先端を尖らし、他方は次第に細くしてその先端約0.5cmを柄状に作り出している。細くなった軸部は断面が楕円形となる。軸部の柄を何かに突き刺して装飾としたものだろう。長さ22.5cm。8は棒の中ほどから片方を断面三角形にしたうえ、その先端を一面は平坦のままで他の2面を船首形に尖らせている。他方は次第に断面を丸く仕上げ柄状となり、先端はほぼ直角に切り落している。使用痕跡は観察できない。長さ23.5cm。

杓子状木製品 厚さ0.4~0.5cmの扁平な板目材を利用した大型の杓子が2点ある。いずれも身の先縁を半円形に作ったもので、身に表裏の区別はない。また身から柄への移行は、次第に幅を狭めて弧状となり、ともに柄は折損している。37は、身の一側縁が欠損しているが、復原幅は約9cm弱となる。身の中央部はやや厚く、両側縁に近づくにつれ薄く仕上げられている。身の先縁には若干の磨滅痕跡がみとめられる。38は、身の幅が約6cm弱で、長さはその約3倍もある長身のものである。身の両側縁は先縁に向って徐々に幅狭くなるとともに、その厚さも減じて先が薄くなる。

(ii) 刷毛等加工のある組み合わせ材

刷毛状品 15は大きく湾曲した板状品で、先方の一側辺が段をなして幅広くなり、他方は幅狭く端部は欠損している。各側辺は面取りされ、全面がていねいな仕上げである。幅広部の長側辺に1.4cm~1.9cm間隔で、径約0.6cm前後の孔が深くあけられている。孔の内面は黒く、焼き火箸であけている。ここへ毛を植えつけてブラシとしたらしいが類例はない。現長21cm、幅広部最大長3.7cm、厚さ1.1cm。

組み合わせ材 9は細長い板材の一端に、幅2.9cmの切り欠きを厚さの中ほどまで施し、そこへX状に5個の釘穴をあけたものである。中央の穴には木釘の一部が残っている。別材が取りつくのだろうが用途は不明である。長さ31.7cm、幅4.4cm、厚さ1.2cm。10はやや扁平な角棒状をし、各面は荒割り

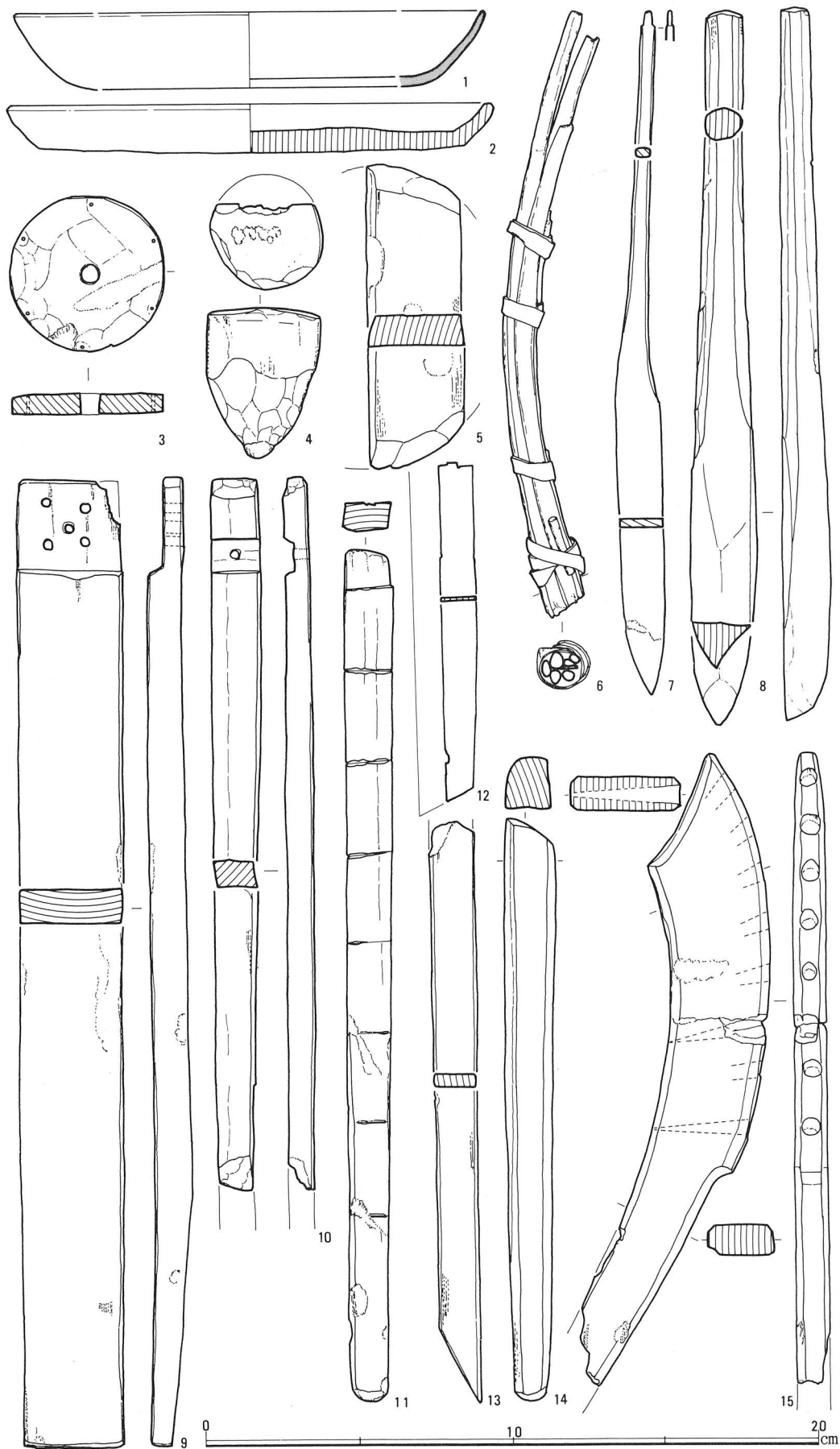


fig.27 木製品実測図

のままで、表裏は若干削って調整している。小口の一端は両面から削り落されて薄くなっている。この小口から2cm内側に、幅1.1cm、深さ0.3cmの相欠きがあり、その中央に釘穴があげられている。ここへ別材が組み合わされて木釘で固定する。用途は不明。現存長23.2cm、幅1.6cm、厚さ0.9cm。
樺巻き棒 6は径0.3~0.6cmの丸棒を4本束ねて、3~5cmの間隔をおいて桜の皮で巻きつけ固定したものである。この樺巻きは、1周のところと3周して強固にしたところとがあり、樺の先端は丸棒を裂いて刺し留めている。現存長は20cmあり、他に同様のものが4片あって少なくとも計40cmを越えるものとなる。湾曲しているため、何かの杵になるのであろうか。

(iii) 工具・物差し

錐 40は円柱の柄に断面四角形の刃をはめ込んだもので、現状では刃は1cm弱だけ残り、先端部はない。茎はX線透過写真でみると3cm余が柄に入っている。現在長14.2cm、柄の径1cm。

刀子 41は柄のみで身は残存しないが、柄中に茎が残る。柄元で観察した茎幅は0.85cmであり、身元は1cm強のものであったろう。茎の長さは6.9cmある。柄元には^{はばき}鋸をはめ込んだ楕円形の溝が残る。柄の背部は平坦に削る。柄尻は欠損している。42は柄に鉄身が約1.3cm残っており、茎の長さは7.1cmある。背幅は0.3cmで、関に段がつき茎は次第に細くなる。柄は背の方向へ若干反り、腹部の断面形は楕円形となる。柄元には鋸をはめ込んだ跡がある。柄尻近くに径0.25cmの紐孔があいている。柄尻は丸く仕上げる。現存長14.9cm。43は柄のみで、その腹部で背方向に屈曲した特徴をもちやや大型品である。柄元には茎幅1.2cmの孔があき、茎孔の長さは7cm余である。柄元には鋸をはめ込んだ痕がある。柄の長さ16.1cm。44は長大な鉄身を残した大型刀子で、身は両面平造りである。柄の長さは12.2cmあり、柄元には幅0.6cmの鋸がある。柄の中央よりやや身寄りに径0.6cmの錆ついた鉄の目釘がある。茎は関で段をつけて幅狭くなり、長さは10cmある。先の目釘は茎のほぼ中央の位置にあたる。X線透過写真では、茎にはこの目釘から0.7cm柄尻方向へ離れたもう1個所に、径0.6cmの目釘穴があいているのがわかる。柄にはもともと全面に黒漆が塗られていたが、現状では中ほどから柄尻部分にかけて残っている。また柄尻から2cm余離れたところには、径0.9cmの紐孔があげられている。正倉院にもこのような大型刀子はなく、いまのところ古代では各地の出土品にも例はない。現存長31cm、身幅2.7cm、柄幅3.4cm。

物差し 11は割板材で、板目材の木表に平均2.96cm間隔で断面がV字形の細い切れ目をいれ、9等分の目盛としたものである。一端は折損しているが、他端はもともとの端が腐蝕したのだろう。この各目盛の間隔は、最小が2.74cm、最大が3.16cmあり、不統一でしかも平行せず、かなり粗雑な作りである。目盛線内は墨で黒くしている。

(vi) 祭祀具

すべて西1坊々間大路西側溝からの出土品で人形16点、削り掛け11点、矢形・刀形・馬形がある。
人形 16・17はともに板目材を割り裂いた薄板を荒く削ったものである。左右からV字形に切り込みを入れて頭と胴を区別し、足を切り出しておらず、下端は直線的に切り落すなど同じ作りである。顔面には墨で眉・目・鼻・口を描く。16には下端から頭の方向へ「新羅□近」と墨書している。16の長さ11cm、幅1.4cm、17の長さ10.9cm、幅1.7cm。厚さは16・17とも0.15cm。18~23もともに板目材を利用したものである。18の頭は周縁を面取りし丸顔に近づいているが、他は圭頭もしくはそれに近い形をしている。18~21は肩を斜に切り落しているが、22・23は水平である。18~22はともに手を切り込み、足を削り出している。23も同様であろう。19・20・22は手の切り込みが左右3ヶ所ずつあり、

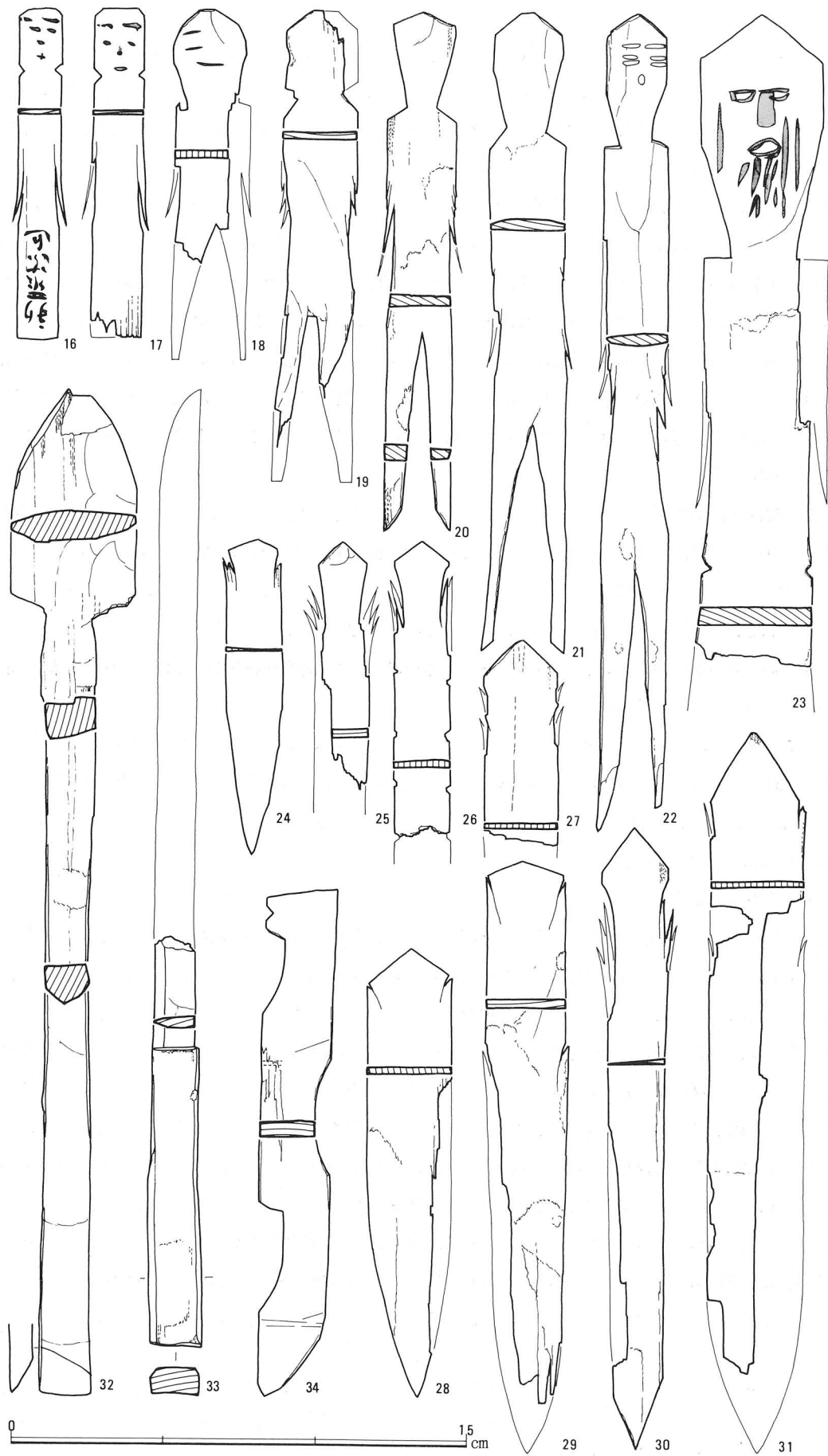


fig. 28 祭祀用木製品実測図

21は2個所であるらしい。19～21の顔面には墨痕はないが、18・22には顔面に眉・目・鼻・口が墨で描かれている。23は眉はないが、髭を表現している。また23には腹部の両側縁にV字形の切り込みがあって、他と較べて板も厚く、復原長30cmを越える中型品である。35は復原全長1 m近くにもなる大型品で、頭部は丸く肩は斜めに切っている。墨痕はない。

削り掛け 細長い薄板を利用して頭部を圭頭にし、下端を剣先状にしたものである。ここでは10.4cmから20cmを越えるものまでである。いずれも左右両側辺から切り込みをいれている。切り込みは、圭頭両端の上面から入れたものと、圭頭下部の両側辺の1個所または数个所から入れたものの二者に大きく分けられる。前者の切り込みには、28のように1回のもものと、24のように複数回入れたものがある。また後者の切り込みには、27・29・31のように1回のもものをある間隔をおいて入れたものと、25・26・30のように複数回切り込んだものがある。31と同大、同形の作りのものが他に2点ある。26は切り込みの下部の両側辺に、一定間隔をおいた対称位置にV字形の切り欠きを4個所以上施しているが、全長は不明である。

矢形 32は柁目割板材を荒く削って、一端を鎌形に他を矢柄に仕上げたものである。鎌の両側辺は、表裏両面から斜に削って薄くしている。また先端は片面から斜に削り落しているが、削り残しがあっていねいでない。矢柄は断面方形で、割り裂いた面に若干刀を加えて調整しただけである。また末端部も片面から斜に一刀で削り落している。長さ33cm、厚さ1 cm。

刀形 33は断面が長方形で、長さ9.8cmの柄に、柄よりもやや幅狭な身を作りだした刀である。身の背幅は、0.3cmで、身の長さは3.8cmのみ残り、大半は欠損している。この種の木製刀形がそうであるように、柄はほぼ中央部で屈曲し柄尻が背方向にわずかに反り上っている。現存長13.6cm。

馬形 34は板目材を両側縁からえぐり込んで作ったものである。周縁は鋭く削って仕上げている。腹部と考えられる側縁の首近くには、支えのための小棒を差し込む小孔があげられている。長さ16.9cm、幅約2.3 cm、厚さ0.6 cm。

(v) その他の日用品

下駄 36は平面形が隅丸方形をした長さ28cm弱の大きな下駄で、板目材の木表を台の上面としている。歯は連歯で、台からノミで作り出したものである。後の歯に枝部の節があてられている。台には鼻緒孔が三ヶ所あげられているが、全体に腐蝕が著しく、その孔も大きくなっている。

紡錘車 3は中央に径0.6cmの円孔があいた円板である。盤の外周から0.1cm内側で、円周をほぼ6等分した位置に径0.1cmの小孔が垂直にあげられている。円板の両面は刀でほぼ平坦に削られているが一面は外周が外へ向って傾斜して削られ、断面が多少薄くなっている。6個の小孔もこちらの面から開けられている。紡錘車とみられるが小孔の役目は不明でやや精巧である。径約5.0cm、厚さ0.6cm。

独楽 4は円柱を上面から約2 cm残して下半部を円錐状に切り落とし、さらに小削りして段をつけて芯を作り出した通有の形の独楽である。上面はほぼ平坦に調整されている。径4.7cm、高さ5.1cm。

以上の他に横櫛10点余、曲物や折敷の底板・側板、編籠、断面を丸く仕上げた工具の柄としたもの、厚さ5 cm以上の板材に鉄角釘が打ち込まれたもの等用途不明の木製品も含めて多数出土した。

木製品樹種一覧

針			葉				樹				
ヒ	ノ	キ	ス	ギ	カヤ	不	明	アカガシ 亜属	ケヤキ?	不	明
3,	6~8,	11~20, 22,	5,	9, 10,	40	1,	21, 24,	4	45	2,	41, 42, 43
		25~28, 30~33, 36~38		23, 34			29, 35, 39				

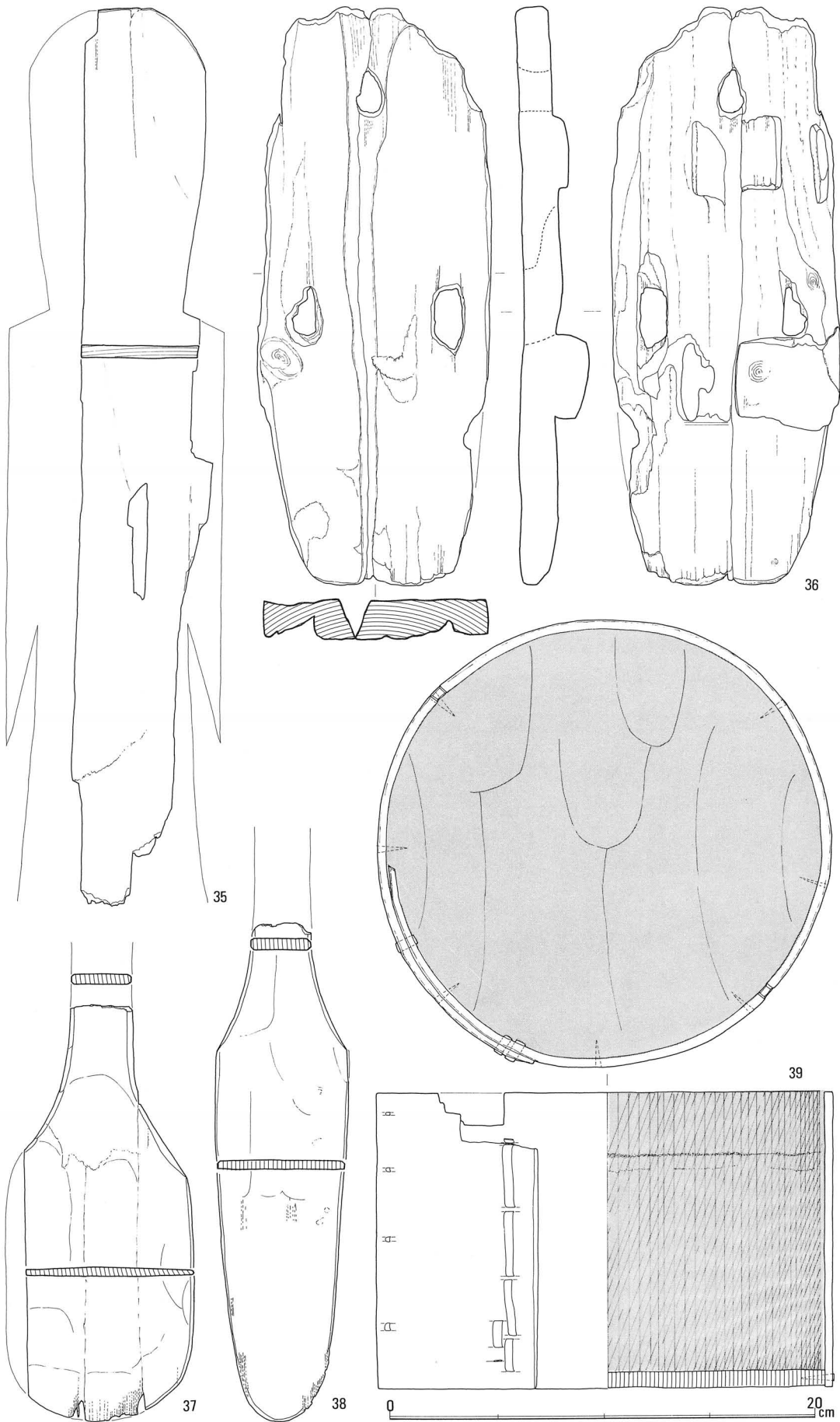


fig.29 木製品実測図

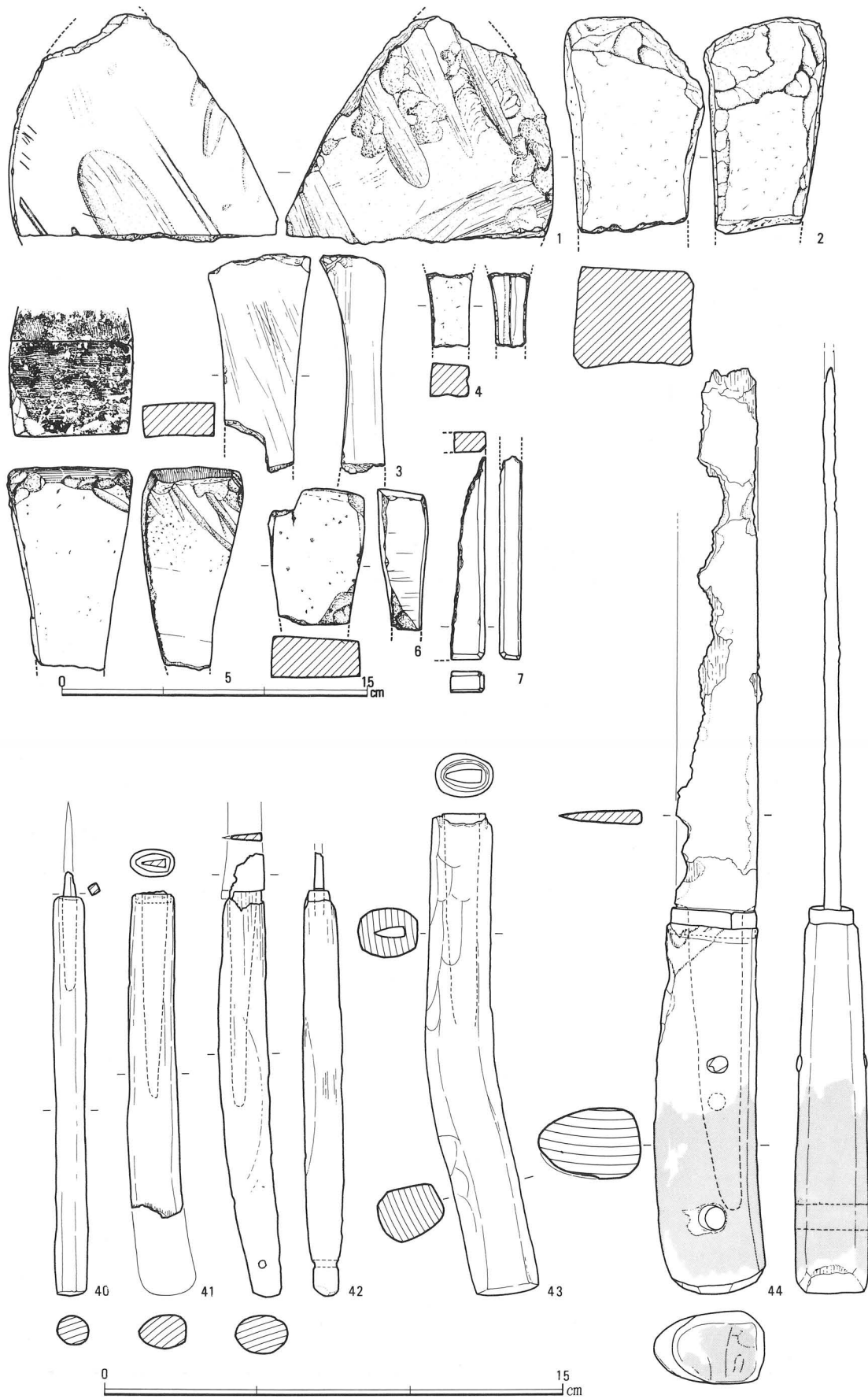


fig. 30 木製品・石製品実測図

G 金属製品・ガラス製品

今回出土の金属製品は総数239点にのぼる。その大部分は西1坊々間大路西側溝S D920からの出土品で、鉄製品75点、銅製品64点、銅銭100点からなる。鉄製品は総じて錆化・腐蝕が著しく、相対的な出土量は少ない。これに対して銅製品の遺存状況は良好で出土量も多く、バラエティーに富んだ内容を有している。出土品の中には、甲張りが残る銅鉾と巡方の未製品があり、S D920から多量に出土した鉾滓や鞆羽口・とりべなどの铸造関係遺物とともに、付近に铸造工房が存在したことを示唆している。また刀、燧鉄、心葉形銅鉾、釣針形銅製品などは、平城宮・京における初めての出土例であり、銅鈴・小銅鏡などの祭祀関係遺物も今回の出土品を特色づけるものとなっている。

(i) 鉄製品 (fig.31, P L.17)

刀子(1~3) 8点出土。いずれも刃関と棟関を明瞭につくり出した平造り角棟の一般的な刀子。1は現長8.4cm、棟厚0.21cm、刃元の身幅0.9cmを測る。2と3は別個体。3の茎長は4.7cm、茎尻は丸くおさまる。fig.30-41・42は木柄を残す刀子。刀身を欠失するが柄の中に茎が遺存し、X線写真によりその形状が判明する。茎長は42が7.1cm、41が6.9cm。ともに柄元をはばき鑷で固定する。

刀 4は棟厚0.5cm、身幅2.8cmを測る大刀の切先破片。両面平造りで切先は丸味をもち、棟も丸味を帯びた角棟となる。また黒漆塗り木柄をもつ fig.30-44は、身部上半を折損し刃部の腐蝕も進むが、刃元の身幅2.65cm、棟厚0.35~0.55cm、茎長10.0cm、身部現長18.2cmを測り、小刀もしくは大形刀子になろう。刀身の反りはなく、両面平造り。目釘と鑷で木柄に固定される。X線の透過により、

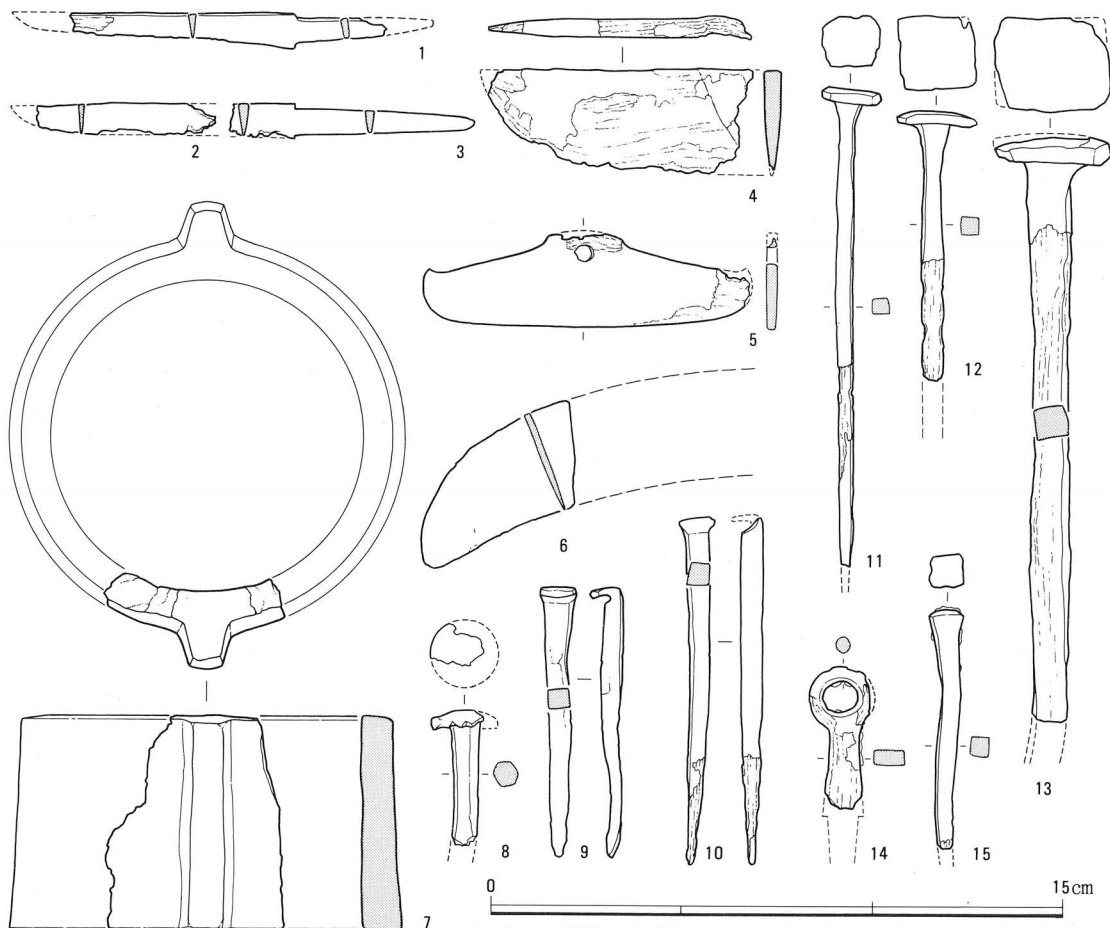


fig.31 鉄製品実測図

目釘直下に径0.55cmの未使用の目釘穴が存在することが明らかになった。茎尻は栗尻となる。

ひうちがね

燧鉄 5 は頂部に径0.4cmの円孔をもつ山形の燧鉄（火打鎌）。横幅8.6cm、縦2.5cm、厚0.3cm。

鎌 6 は鎌の刃部先端破片。棟厚0.2cmの薄手のつくりで、現存部の最大刃幅は2.7cmを測る。

車軸頭形鉄器 7 は車軸受けの金具と推測される。鋳造品で、円筒の外側に縦位の突帯がつく。全体の1/4破片であるが、東三坊大路東側溝出土品に類例があり、径10.4cm（内径8.4cm）の円筒の対称位置に2本の突帯がとりつくことが判る。内面と下面は磨耗により平滑になるが、他は鋳放しのままの粗面を呈する。上端厚0.75cm、下端厚1.0cm、高さ5.7cm、突帯幅1.2cm、突帯高1.0cm。

たがね

鑿 8 は叩き潰れた頭部と断面六角形の脚から鑿と判断される。東堀河の出土品に類例がある。

鉄釘（9～13） 釘は53点出土した。腐蝕折損し全形を知りうるものは少ない。頭部を欠失した角棒状の鉄製品22点の中には、鉄鏃や錐の断片が含まれる可能性がある。**折頭釘**は12点ある。断面長方形の脚の上端を叩きのぼし折り曲げて釘頭とする。**9**は唯一の完形品で長さ7.1cm。**10**は脚断面が正方形に近い例外的存在。**方頭釘**は15点出土。方形の頭部を脚頂部に鍛接したもので、脚断面は正方形に近い。いずれも脚下半を折損しており完形品はない。**11**は現長12.5cm。**12**は厚さ3.5cmの板材に打たれた状態で出土。**13**は現長15.3cmの大形釘。**15**は特別な頭をつくり出さない角錐形の截頭釘。1点のみ出土。箱や櫃などの接合に用いられた釘であろう。現長6.3cm。**円頭釘**は2点あるが、腐蝕が著しい。径3cm前後の円形笠形の頭部を脚頂に鍛接したものである。**14**は頭部を断面円形の環状に、脚部を断面長方形につくる**環頭釘**。折損する脚が下方に向かって幅を広めているところから、櫃などにつけられた鑿子用の壺金具と考えられる。1点のみ出土。

(ii) 銅帯金具 (fig.32, P L . 17)

銅帯の鉸具、丸柄、巡方、鉈尾が29点出土した。京内の調査では最多の出土量を誇る。S D 901出土の鉈尾**(36)**を除く28点は、すべて西1坊々間路西側溝S D 920からの出土である。

鉸具（16～18） 5点あるがすべて破損しており完形品はない。**16**はC字形外棒片。全面に粗い鑿目が残る。基部の一端を振り折られ変形著しいが、縦4.6cmの大形品に復原できる。**17・18**は2鉸留の板金具で、ともに軸棒と外棒の基部を残す。**18**の板金には刺金を固定するための切込みがなく、刺金を伴わぬ形式の鉸具となる。板金具の周縁は鑿がけにより斜めに面取りされ、端部に鉸留の2孔を穿つ。軸棒には**18**が長さ2.2cm、一辺0.15cmの角棒を用いるが、**17**では角棒の角を取り、断面八角形に仕上げている。外棒はいずれも鑿がけによって断面三角に整形され、基部の軸孔に軸棒を挿入後軸棒の両端を叩きつぶして両者を固定する。**16**と**18**には黒漆の痕跡が残る。

丸柄（19～23） 完形に近い表金具が4点、裏金具が1点あり、他に表金具の断片が2点ある。すべて3鉸留で、表金具の内面三隅に鉸足を鋳出す。**20～22**は平板状の表金具。**21・22**は同寸法につくられるが、透し孔に大小の差が著しい。外面は鑿整形により平滑に仕上げ、周縁は斜めに面取りされる。内面は鋳放しのままの粗面を呈し、**22**では透し上部の鉸足両側が三ヶ月形に窪む。**23**は断面を甲高の台形状につくる表金具。表面は研磨され黒色の光沢をもつ。側面には整形時の鑿目が顕著に残り、透し孔の四隅にも鑿整形時に生じた鑿のアタリを残す。**19**は透し孔をもつ裏金具。板金に鉸受けの孔を穿ち、側面を斜めに鑿整形する。**21・22**に黒漆の痕跡が残る。

巡方（24～32） 完形に近いものが11点、破損品が2点ある。**24・26・28**は平板形式の表金具。内面四隅に鉸足を鋳出し、外縁を斜めに面取りする。**24**は外縁と透し孔内部に甲張りが残る未製品で、全体に外湾しており、鋳上がりが悪いために整形を断念した不良品と考えられる。現寸法は横2.66cm、

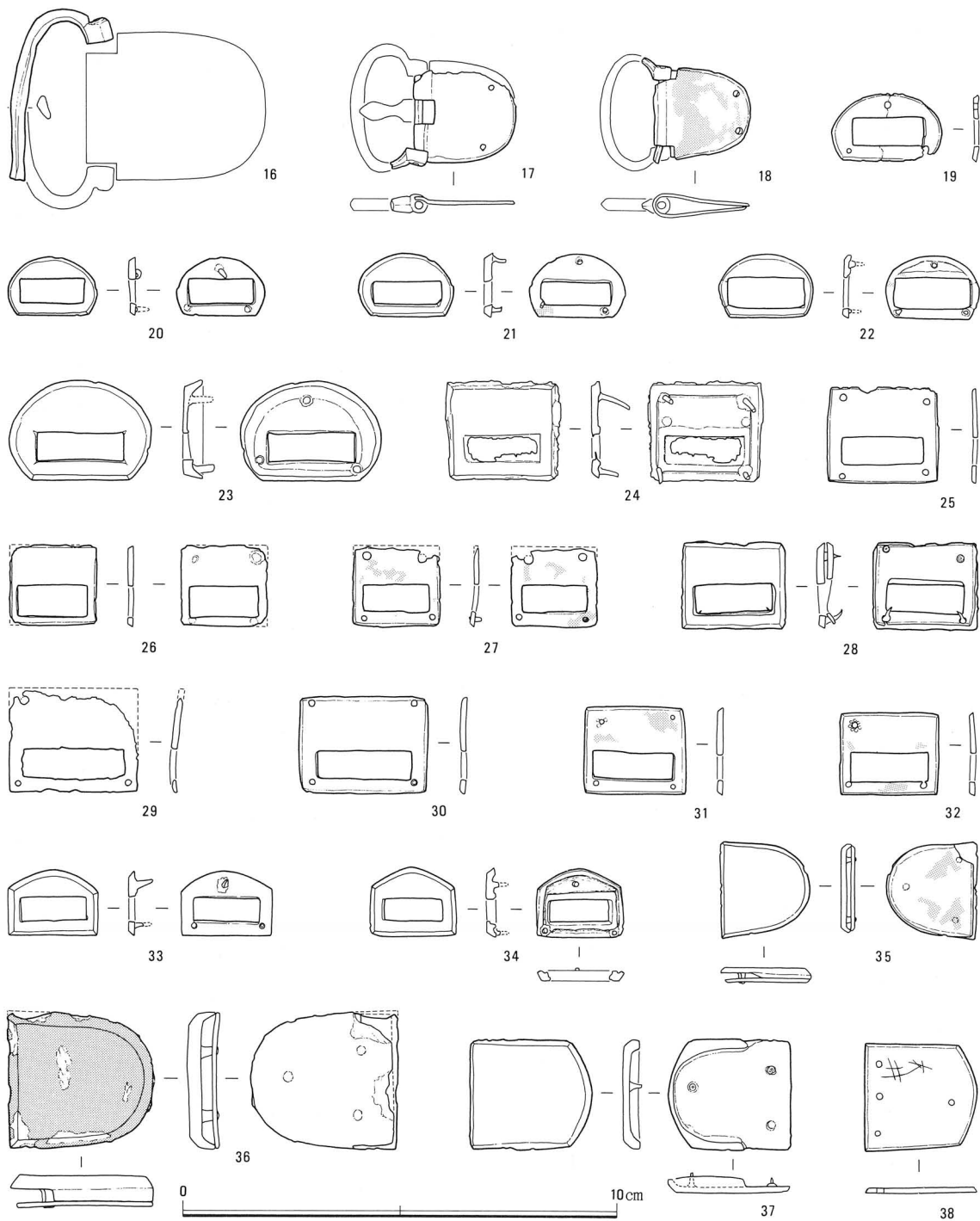


fig.32 带金具実測図

番号	種類	表裏	横幅	縦幅	厚	透孔	番号	種類	表裏	横幅	縦幅	厚	透孔
19	九 鞆	裏	2.56	1.56	0.1	1.64×0.65	29	巡 方	裏	3.04	(2.37)	0.15	2.34×0.70
20	"	表	2.05	1.33	0.13	1.45×0.53	30	"	"	2.97	2.24	0.13	2.14×0.65
21	"	"	2.20	1.43	0.2	1.58×0.51	31	"	"	2.39	2.00	0.13	1.83×0.58
22	"	"	2.18	1.45	0.15	1.76×0.69	32	"	"	2.27	1.90	0.1	1.76×0.63
23	"	"	3.26	2.29	0.45	1.92×0.59	33	山形巡方	表	2.11	1.50	0.13	1.47×0.52
24	巡 方	表	2.51	2.16	0.2	1.83×0.60	34	"	"	2.04	1.57	0.2	1.32×0.51
25	"	裏	2.59	2.20	0.1	1.85×0.60	35	鉞 尾	表・裏	2.09	2.22	0.32	
26	"	裏	2.02	1.83	0.1	1.58×0.68	36	"	"	3.43	3.10	0.7	
27	"	裏	2.02	(1.85)	0.1	1.53×0.58	37	"	表	2.82	2.53	0.4	
28	"	表	2.38	1.99	0.15	1.82×0.71	38	"	裏	2.58	2.46	0.12	
	"	裏	2.31	1.90	0.1	1.76×0.78							

tab.6 带金具寸法一覧

縦2.27cmであるが、内面の界線により、仕上り寸法が横2.51cm、縦2.16cm前後に計画されていたことが判る。内面には長さ0.65cmの鉾足が鋳出され、透し孔と外縁に沿って二重の凸線が巡る。28は同大の裏金具を伴なう。裏金具には表金具よりもわずかに薄い銅板を用いている。25・27・29～32の6点は透し孔をもつ裏金具で、他に断片が2点ある。いずれも板金でつくり、外縁を斜めに鑢整形する。四隅に鉾受けの小孔を穿つが、32には3孔しか認められない。27・30にはかしめとめた鉾足が1鉾ずつ残存する。また27・29～32には黒漆がわずかに残り、27・29・30では黒漆の塗布が内面にまで及ぶ。33・34は上辺が弧をえがき、丸靱と巡方の中間形態をとる山形巡方。ほぼ同寸法の平板形式の表金具で、丸靱と同位置に3鉾を鋳出す。周縁は斜めに面取りされ、33には鑢目が顕著に残る。内面は粗面を呈するが、34は透し孔と外縁に沿って肉を高めており、24と近似したつくりとなる。

鉾尾（35～38） 完形品が4点出土した。表金具は3点あり、すべて3鉾を鋳出する。35・36には裏金具が鉾留されたまま残る。革帯先端を挟みとめるため、基部の鉾足より先を甲高につくる。裏金具は0.1cm前後の板金でつくるが、表金具に固定後、周縁および表面に鑢がけを施す。35・36から推定される革帯の厚さは、35が0.15cm、36が0.3cmである。表金具にはいずれも黒漆塗りの痕跡が残る。38は4鉾留の裏金具。研磨された金具表面に針書による「^{大カ}井」の線刻文字が認められる。

(iii) 銅製品 (fig.33, P L.18)

銅鈴（39～43） 5点出土。完形品が3点あり、他の2点は上・下が分離した状態で出土した。いずれも球形の鈴で、下半部を大きめにつくり、上半部に重ねて接合する。鈕は球頂を切りこみ銅板をさしこんでかしめとめる。下面には一文字の切り口が鈕と直角方向にあげられている。39は鍍金の痕跡をよくとどめており、他には黒漆塗りの痕跡が残る。39・43には鉄滓を利用した丸が、40には中空の鉄丸が遺存し、澄んだ金属音を発する。周長は39が8.4cm、40が8.1cm、41が6.6cm・42が7.2cm、43が8.05cmを測り、それぞれ2寸2・4・7・8分の規格でつくられたことが判る。2寸7分以上の鈴の鈕は、頂部の角を落としており、2寸4分以下の鈴の鈕と形態を異にする。

銅針金（44・48・49） 44は先端が尖がる径0.35cmの銅線。鑢整形により先端に向ってわずかに径を減ずる。現長3.6cm。49は鍍金の施された径0.2cmの銅線で両端に切断痕をとどめる。現長3.8cm。48は径0.15cm、長さ6.53cmの銅線に細かな右回転の振りを加え、一端を直角に折り曲げたもの。

銅切屑 50は6弁の花文を截りとった厚0.03cmの銅板切屑。片面に鍍金を施す。銅板の一端が残り、花形の弁端を接するように無駄なく同文様を切り抜いたことが判る。他に細板状の切屑が4点ある。

銅釣針形金具 51は1本の銅線からなる製品で、釣針に似た形態をとる。鉤状に曲げられた径0.3cmの銅線の上端を徐々に細め、円環部を二重につくり、端部を円環直下の軸部に七重に巻きつける。全長3.8cm。先端近くに缺で曲げた際のアタリが認められる。物を釣り下げるための金具であろうか。

銅座金具 52は菊形の座金具。截頭半球形の表面に細かな振菊の花弁を鋳出す。小破片であるが、高さ0.95cm、外径2.3cm、内径1.1cmに復原される。花弁は26弁前後となろう。弁間に黒漆が残る。

銅飾鉾（53・54） 頭部と脚を一体に鋳出した鉾が2点ある。53は縦1.53cm、横1.4cmの心葉形の鉾頭をもつ。脚は断面円形で先端を欠く。現長1.7cm。平城宮・京からの銅鉾の出土例は多く、花形、星形、杏仁形など多様な鉾頭がみられるが、この心葉形鉾は、出土品はもとより正倉院の伝世品にも類例のない特異な形式の鉾である。54は円形の鉾。外縁に切断されたままの甲張りを残す。甲張りの状態から、複数の鉾を一列に並べ同時鋳造したことがわかる。本例は甲張り切断後の鑢整形を経ない未整品である。脚は細い角錐につくるが、下半を欠失する。鉾頭径1.17cm。現長1.0cm。

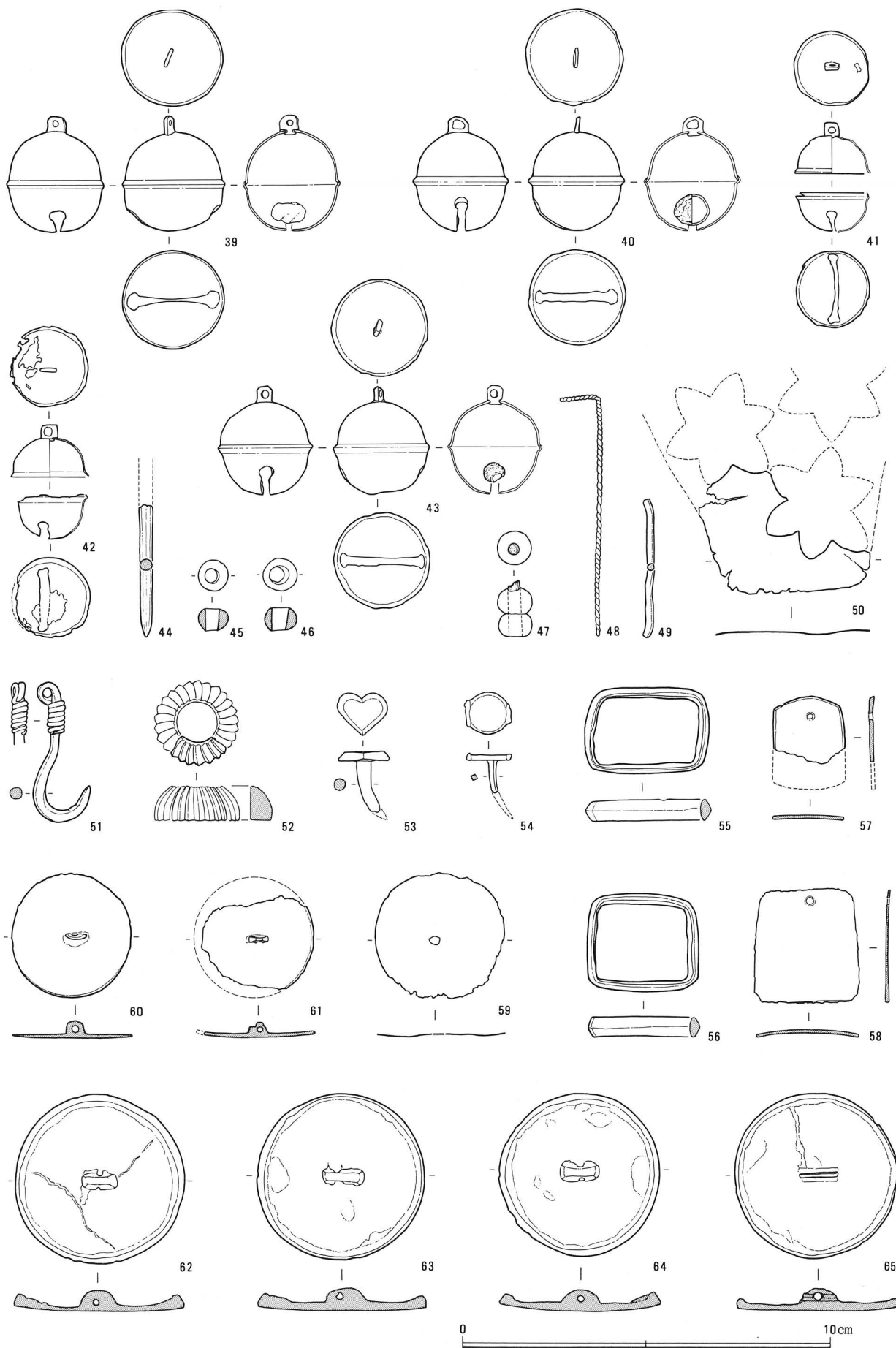


fig.33 銅製品・ガラス製品実測図（銅製品 $\frac{2}{3}$ 、ガラス製品 $\frac{1}{3}$ ）

銅留金具 (55・56) 方形の棒状金具。接合部のない所から铸造品とみられる。ともに断面は高さ0.55cm、厚0.25cm前後で、上・下端にわずかな平坦面を残し、鑢がけにより外面中央に稜をつくり、内面を凸面に整形する。正倉院に伝存する馬具の付属金具に近似しており、革紐の先端を固定するための留金具と考えられる。55はわずかに変形するが横3.40cm、縦2.33cm。56は横3.04cm、縦2.64cm。

瓔珞 (57・58) 佐波理鏡の破片を梯形に切断し、上端に径0.2cmの円孔を穿った垂飾。短辺と長辺の両方向にゆるやかな湾曲をもつ。58は周縁に切断時の細かな凹凸を残す。下端には鏡の口縁近くの凹線が残り、全体の湾曲から口径22cm前後の鏡が復原される。上端厚0.05cm、下端厚0.11cm、上辺2.45cm、下辺2.82cm、全長3.09cm。57は下半を欠損する。上辺は山形を呈し、周縁は切断後に鑢整形され平滑になる。上幅1.86cm、現長1.8cm、厚0.9cm。佐波理鏡破片を利用した瓔珞は、平城京西市や東3坊大路東側溝からも出土しており、定形化した転用製品であることが判る。

銅円板 59は厚0.03cmの薄い銅板を径3.5cmの円形に裁断したもの。周縁の腐蝕が進むが中央に径0.3cmの孔があく。沖ノ島祭祀遺跡出土品にみえる鏡の最も簡略な雛形であろうか。

銅鏡 (60~65) 二種の型式からなる素文小鏡が6点出土した。いずれも铸造品で、鑢がけにより面形を整え、規格された寸法に仕上げられている。**素文小鏡A (60・61)**は縁をつくり出さない薄い平板状の儀鏡。丁寧な鑢がけと研磨により厚0.1cm前後に整形され、鏡面はわずかに凸面を呈する。面径は60が3.28×3.32cm、外縁を大きく欠く61も径3.3cm前後に復原され、ともに面径1寸1分に規格された鏡となる。60は鈕を除く全面に顕著な鑢目が残し、鏡胎は薄い凸レンズ状に仕上げられる(面中央厚0.12cm、外縁厚0.08cm)。鏡芯からわずかにずれた位置に、幅0.5cm、厚0.1cm、高さ0.35cmの板状の鈕がつき、径0.2cmの円孔があく。61は面中央厚0.12cm、外縁厚0.06cmで全体に反りをもち、端部は斜めに鑢面取りされる。鈕は鑢がけにより一部変形するが、幅0.51cm、厚0.17cm、高さ0.32cmの板状の鈕に径0.15cmの円孔があく。**素文小鏡B (62~65)**はいわゆる唐式鏡を模した粗雑な素文小鏡で、鏡縁を厚くつくり出す。鏡面は丁寧に研磨されるが背面は鑄放しのままの粗面を呈する。4面とも径4.5cm前後を測り、面径1寸5分に規格統一されている。形態も近似するが、鈕や鏡胎の反り、鏡縁などにわずかな差異がみられるところから、同範鏡とは認めがたい。鏡背は周縁が斜めに鑢整形されるために三角縁に近い縁となり、浅い匙面を形成して中央の素鈕にいたる。鏡面は凸面をなすが、反りの強い62・64と、反りの弱い63・65の二者に分かれる。また鈕は65のみが鑢整形により、Aに似た板状の鈕となる。鈕孔は径0.2cm前後。いずれも鏡背の凹凸激しく、62・65には範傷が認められる。62面径4.60×4.65cm、縁厚0.22~0.38cm。63は面径4.49×4.57cm、縁厚0.22~0.36cm。64は面径4.37×4.39cm、縁厚0.24~0.35cm。65は面径4.42×4.45cm、縁厚0.24~0.33cm。

素文小鏡Bは、三重県八代神社、愛知県西幡豆、石川県寺家などの祭祀遺跡からの出土鏡がよく知られている。奈良県下でも薬師寺金堂本尊須弥壇、大官大寺塔跡、安倍寺などから、地鎮、鎮壇具として出土しており、平城宮内でも数例の出土がある。出土鏡の多くは、本例同様面径1寸5分に規格されており、中には1寸2分・3分につくられたものも若干認められる。素文小鏡Aは、平城京東3坊大路東側溝や石川県寺家遺跡に類例があり、A・B両者とも祭祀用に製作された鏡と考えられる。

(iv) **ガラス製品** (fig.33, PL.18)

ガラス小玉 (45~47) 緑色を呈するガラス小玉が4点ある。47は芯に銅線が通り2点が連結して錆着する。一部に銀化がみられるが、同系色の発色をしており、一連の製品とみられる。径0.6cm前後、高さ0.4cm前後、内径0.23~0.36cm。蛍光X線回折分析の結果、鉛ガラスであることを確認した。

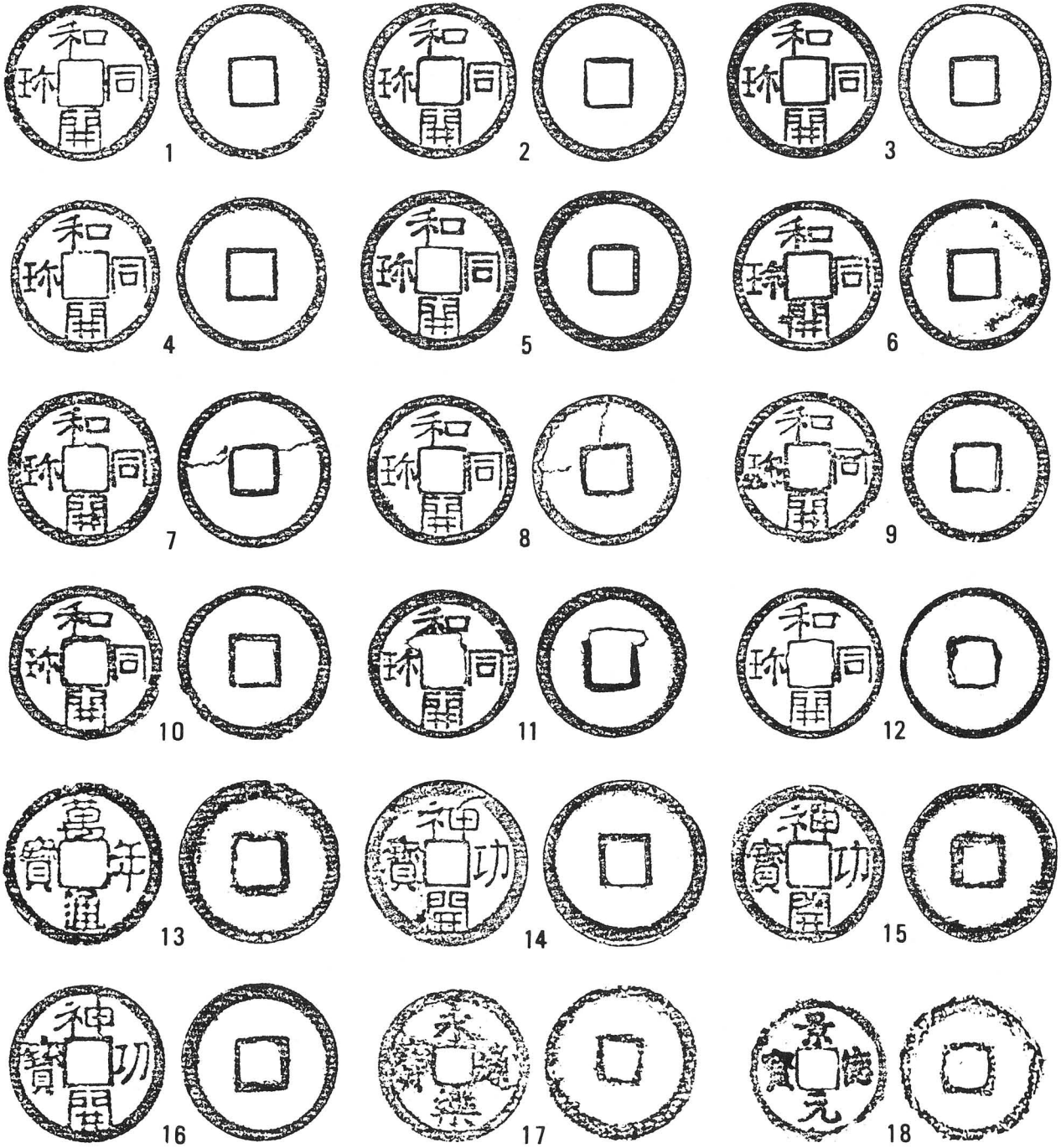


fig.34 錢貨拓影圖

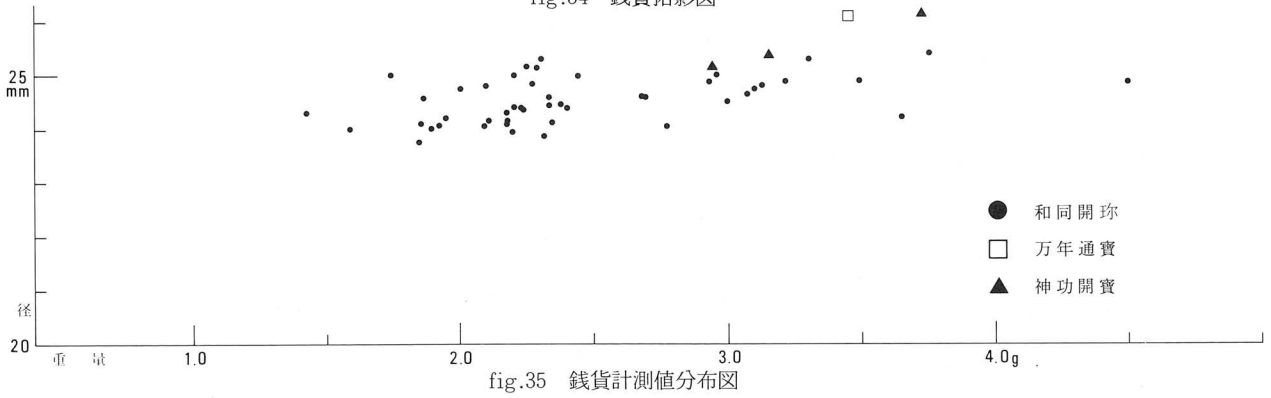


fig.35 錢貨計測值分布圖

(v) 錢貨 (fig.34, PL.18・19)

5種100点の銅銭が出土した。その大部分を占めるのは和同開珎・万年通寶・神功開寶の3種の皇朝銭で総数98点を数える。これらの皇朝銭はすべて西1坊々間大路西側溝S D 920から特定個所に集中することなく、また層位差をもたずに出土したものである。他の2点は中国銭で、包含層出土の景德元寶(1005年初鑄)と、調査区北東部の粘土採掘坑から出土した永樂通寶(1411年初鑄)である。

和同開珎(1~12) 93点出土。全体に鑄上がりがよく、鮮明な銭文を残す。完形品が50点あり、平均重量2.47g、平均径2.45cmを測る。すべて「開」の字の門構え上部が隸書風に開いた「隸開和同」で、古和同はない。1~3は全体に字画が細く角張った簡明なもの。最も一般的な和同銭であり、「普通和同」とよばれ和同開珎Aに分類される。周縁部の広狭や字画の配置などに多少のバラエティーがある。4・11は和同開珎Dに属す。銭文は和同開珎Aに類似するが、背面の内郭縁が他よりも大きい点に特徴があり、「背広郭」とよばれる。同型式のものが他に2点ある。5・12は背面の内郭外縁の四隅を丸くつくる和同開珎E。他に6点類品がある。5は今回出土した和同銭中、最大の径(2.54cm)をもつ。6は和同開珎F。「和」の字が内郭寄りに配されたために、和の第三画がわずかに短く、第八画が内郭に近接する。「降和」と称せられるもので、他に2点出土している。和同銭は総じてつくりが良く不良銭は少ないが、範傷をもつものが3点(7~9)あり、鑄上がりが甘く銭文に鮮明さを欠くもの(9・10)もみられる。10は銭文が不鮮明な上に、平均重量の倍近い4.05gの重量を有しており、私鑄銭の可能性もある。また11は内郭孔の甲張りをとる際の鑿切断が狂い、切断が「和」の下半に達したものの。12は鑿の刃に生じた傷が切断痕に窪みとなって現われたものである。

万年通寶(13) 完形品が1点出土。「萬」の字の下半を「内」につくり、年の第四画は縦につく。「縦点万年」とよばれるものであるが、背面内郭の外縁四隅が丸く万年通寶Cに属する。背面はわずかに型ずれを起こし、鑄出し浅く不鮮明。重量3.46g、径2.61cm。

神功開寶(14~16) 4点出土。いずれも鑄上がりは良い。14・15は「功」の旁を「力」に、「開」を正字「不隸開」につくる点で共通しており、「力功神功」とよばれる。神功開寶Bに属するが、14は径が一回り大きく「力功大様」となる。「神」の字に範傷が走り、背面に型ずれを生じる。15は背面内郭の外縁四隅が丸く、内郭孔は鑿打ち放しのまま。外周の鑄仕上げも粗く、不整円形を呈する。16は神功開寶の中では最も類例の多い神功開寶E。隸開につくり、「功」の旁を長くのびた刀で表現するところから「長刀」とよばれる。他の一例も半欠品であるが、本型式に属す。

註1『平城宮発掘調査報告VI』 奈良国立文化財研究所学報第二十三冊 1974

H 鑄造関係遺物 (fig.36, P L.19)

西側溝S D 920からは、とりべ・鞆羽口・鉞滓・砥石が多量に出土している。また外面が熱を受けて変色している用途不明の土製品もある。これらの遺物は特に第3層に集中している。

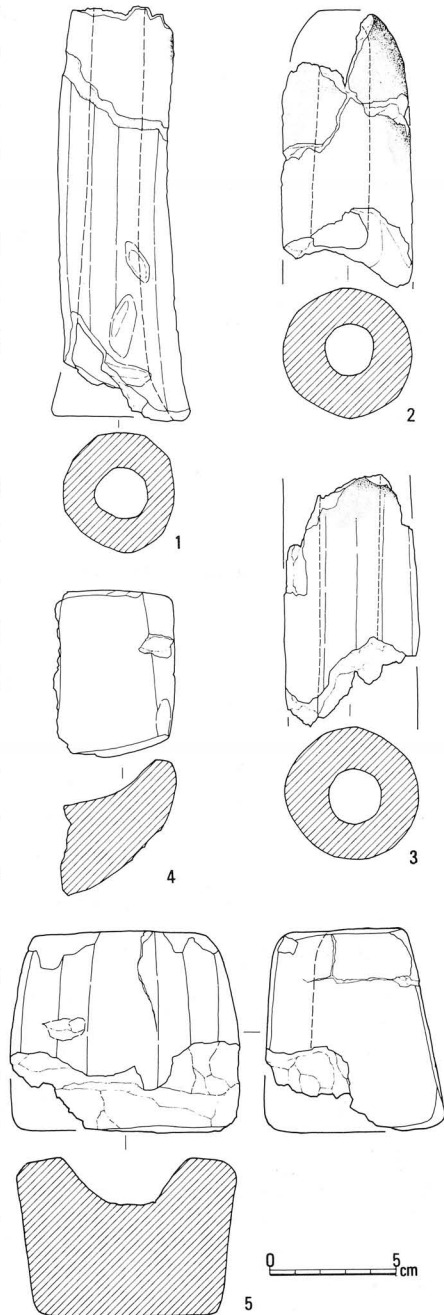
とりべ 50点余出土している。いずれも小破片であるが浅くて底の丸い椀形となるものである。口縁部の破片から判断すると、大小2種の大きさがある。いずれも石英粒を多く含む胎土で、外面黒色、断面灰白色を呈するものが多い。器壁の厚さは1cm前後の場合が多いが、小形のものでは、5mm前後と薄い作りのものもある。このほか、土師器の内面に粘土を塗り重ねてとりべとして用いているものが9点出土している。

鞆羽口 30点余出土しており、いずれも灰白色の比較的精良な粘土を用いている。1は炉側先端部

を欠失するが鞆側は旧状をとどめる。細長く鞆側が八字状に広がる形態。炉内に突出する部分と炉壁に埋め込まれる部分との境には、幅4～5mmにわたり粘土がはがれて溝状となる部分がある。炉内への挿入角38度。炉内に突出する部分は熱を受け紫黒色に変色している。外径4.4cm、通風孔径2.1cm。
2と3は炉側先端部が細く他端が太くなる通有の形態。外面の一部は熱を受け灰黒色となる。2は炉側先端部周辺に厚く鉍滓が付着する。外径5.2cm、通風孔径2.2cm。3は外径5.3cm、通風孔径2.3cm。

用途不明土製品 4は灰色の比較的精良な粘土を用いる。各面は平滑に仕上げるが、内彎する面には長辺に平行する棒状圧痕が一部に見られる。縦6.4cm、横5.9cm、折損部の厚さ3.9cm。5は4よりやや砂粒の多い粘土を用いる。一端を欠失するがほぼ全形をうかがうことができる。方錐台形の側面に断面半円形の溝が縦に通る。4と同様に溝には棒状圧痕が見られる。縦8.0cm、横8.7cm、厚さ6.2cm。この2点は、胎土・調整が類似し、内彎する溝状部の径がほぼ一致するなどの類似点が見られる。いずれも一部が熱を受けて変色しているが鉍滓の付着は見られない。真土を塗った痕跡もなく鑄型ではないであろう。

鉍滓 鉍滓は約2.8kg出土している。蛍光X線分析の結果いずれも銅、錫、鉛を主成分とする青銅滓であることが明らかとなった。また熔融した金属が滴状に固まったものが3点出土しており、この内の2点について原子吸光分析を行った結果、銅86.8%、鉛1.9%、錫0.2%と銅64.4%、鉛1.1%、錫0.2%との結果であった。以上の分析結果よりみて、これらの出土品は青銅製品の鑄造に関してできたものであろう。



I 石製品 (fig.30, P L.19)

fig.36 鑄造関係遺物実測図

砥石 1は、厚さ1～2cmの円盤状で、片面は全面がきわめて平滑に研磨されている。その上面には角ばった直線状の研ぎ痕2本と、幅広く断面が凹レンズ状の研ぎ痕1本がほぼ同一方向にあり、それと交わる方向にもう3本の浅い研ぎ痕がある。背面は平坦面がなく同一方向に6本の研ぎ痕があり、またそれと直角方向にも2本の研ぎ痕がある。外周の一端は円弧状に研磨され、その対面も凹凸はあるが荒い擦痕がある。刃物用の砥石ではなく玉などを磨くためのものであろう。2～6はいずれも破損しているが、本来は長方形をなし断面方形である。表裏側面の四面とも使用し、中央部が擦り減り細くなっている。2・5・6は小口面を使用していない。2は凝灰質砂岩、1・3～6は石英斑岩である。7は厚さ1.1cmの板状で上下面と2側面が平滑に仕上げられ、各角が面取りしてある。特に表と考えられる一面はていねいに仕上げられているが、用途はわからない。滑石製である。

J 動物遺存体

(i) 西側溝出土動物遺存体の概要

発掘時に採集した動物遺存体の破片数は700点あまりであるが、保存が悪く同定できたものは150点弱であった。溝に埋没した骨は地下水の作用で骨に含まれる燐分が溶け、地下水に含まれる鉄分と化合して藍鉄鉱 (Vivianite, $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$) と呼ぶ濃青色のガラス質結晶を折出して脆くなっている。同定できた資料には歯が多いが、これは歯のエナメル質が特に腐食に強く、残り易かったためである。四肢骨の内部にはゼラチン状の物質が残るが、これは脂肪、蛋白質、コラーゲン物質が水を媒介にミセルと呼ぶ物質を形成し、一見コロイド状の化合物となったものである¹。同定できた動物種には次のようなものがある。骨の大半は、奈良時代末～平安時代初めの第2層から出土した。

- (1) ウマ *Equus caballus*
- (2) ウシ *Bos taurus*
- (3) イヌ *Canis familiaris*
- (4) シカ *Carvus sp.*

(1) ウマ

上記の動物中、最も多くの出土量があった。歯によるとすべて成獣である。小地区別の出土量を見ると特定の小地区に出土が集中する (fig.38)。その集中しているところでは歯や顎骨、四肢骨が1頭分、稀には2頭分みられる。このことからこれらの骨が集中する部分にはウマが死んで投棄され、腐って埋まるまでに部分的には流されても遺体のかなりの部分が埋没していたと考えられよう。そこで以下、このように骨が集中する個所ごとに出土状態を述べる。

OF 91・OG 91 発掘時に全身骨格の存在を確認したが取り上げが困難な状態であったため、整理段階で同定できたのは頭骨・左桡骨・右尺骨・右中手骨・左右大腿骨・左右脛骨・左腫骨・左右距骨・左基節骨であった。頭骨は石膏で補強して採集した。計測値は以下の通りである (計測値は注記のない限りmm単位である)。眼窩横径56.0、同縦径52.0、上顎臼歯全長170、同前臼歯長97.0、下顎臼歯全長175、前臼歯全長94、後臼歯全長84.0、他の計測値は鼻骨・後頭骨破損のため計測不可能。

ON 92・93、OO 92・93、OP 92 左下顎骨、頭骨破片、寛骨、左上腕骨、右尺骨、右中手骨、右脛骨、右中足骨、右中筋骨が出土している。計測値は左下顎臼歯全長175である。

OR 93、OS 93 上・下顎骨の臼歯が左右ともすべて揃っている。この他に右上顎第2後臼歯が1本存在するので、別個体の骨もある。右中足骨が同定できたが細片が多い。左下顎前臼歯全長80.2。

NA 91・92・93 左右下顎骨、別個体の右下顎骨が存在する。四肢骨は右中手骨・左中足骨・左大腿骨・右距骨・頸骨が同定できた。下顎臼歯全長170、前臼歯長88.5、後臼歯長82.0、別個体のものは右下顎臼歯全長167、前臼歯長81.5、後臼歯長78.5。

(2) ウシ

OR 92より左上顎歯8本、**NC 93**で右中足骨、**OF 92**で右中手骨各1点が出土している。歯の状態は磨耗が少なく比較的若い個体であったと考えてよい。

(3) イヌ

OF 92より下顎骨3点が出土した。うちの2点は同一個体のものである。計測値は後臼歯列長28.8、もう1例は28.3である。

(4) シ カ

OF92より右中手骨、または中足骨遠位端が1点出土している。骨端部は癒着が終了しているが非常に小さい。(下端最大幅28.8、最大厚20.0)

(ii) まとめ

古代にはウシやウマが農耕儀礼等により犠牲にされる例があるが(土肥1983)、今回のウマやウシの出土状態からはそのような証拠は見られなかった。

遺跡から出土するウマの形質については林田重幸らの研究が詳しく(林田1956、林田・鈴木1974)、今回の資料をそれらと比較する。下顎臼歯全長を例にとると、本資料は175、170、170、167であるのに対し、古墳時代の岡山県川入遺跡では161.0、上東遺跡では156.0である。また現生のトカラ馬(体高109.5cm)では157.0、御崎馬では166.0である。四肢骨でただ1例全長を知り得た中手骨では265をはかり、推定体高132以上で神奈川県材木座出土の軍馬の平均体高129.5cmをも上まわる。今回得られた資料は保存も悪く、計測値も少ないが、これらを持って奈良時代末～平安時代初めに平城京で飼われていたウマの形質を代表できるとするならば、すでに平城京では中世のウマと変わらない大きさのウマが飼われていたことになる。今後資料の増加を待って詳しく論じたい。

ウシの遺存体はウマに比べるとはるかに数が少ない。この傾向は同じ平城京内の東堀河での発掘所見とも一致しており(松井 1983 P.32)、京内ではウシよりウマの方が数が多かったと言えよう。

註1 帯広畜産大学 中野益男氏の御教示による。

参考文献

- 土肥 孝 1983「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』pp.383-400
- 林田重幸 1956「日本古代馬の研究」、『人類学雑誌』第64巻4号、pp.197-210
- 林田重幸・鈴木孝司 1974「川入遺跡出土の馬骨について」、『倉敷市上東遺跡出土馬歯について』『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』pp.354-367、岡山県教育委員会
- 松井 章 1983「動物遺存体」、『平城京東堀河』p.32、奈良国立文化財研究所編

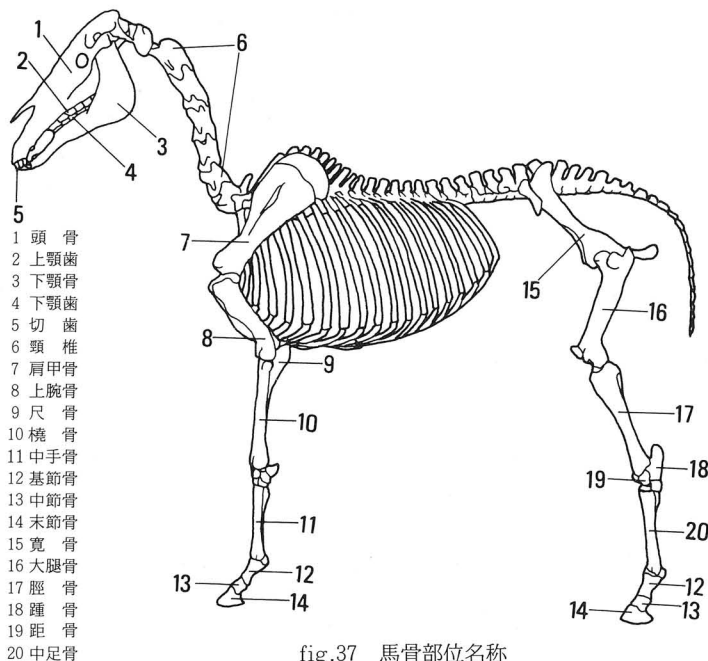


fig.37 馬骨部位名称

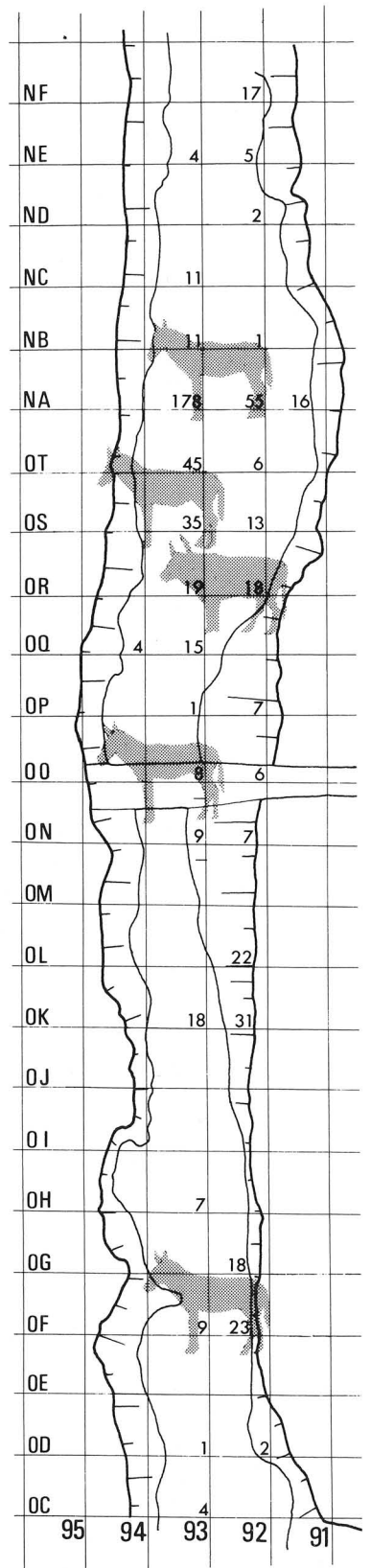


fig.38 動物遺存体出土分布

ウ マ									
上顎第1切歯 I ¹	OS93↑ 左	OF92↑ 左							
上顎第2切歯 I ²	OS93 左	OF92 左							
上顎第3切歯 I ³	OS93 左	OF92 左							
上顎第2前臼歯 P ²	OS93 右 L 35.1 W 23.2	OF92 左右							
上顎第3前臼歯 P ³	OS93 右	OF92 左右							
上顎第4前臼歯 P ⁴	OS93 左右 L 28.5 W 27.5	OF92 左右	OR93 左 W 25.2						
上顎第1後臼歯 M ¹	OS93 左右 L 25.0	OF92 左右	NF92 左 W 25.5	NF93 右 L 25.0 W 20.0					
上顎第2後臼歯 M ²	OS93 右 L 24.0 W 23.1	OF92 左右	ND92 右	NE93 右 L 23.5	OS93 右 L 24.0 W 23.2				
上顎第3後臼歯 M ³		OF92 左右 ↓							
上顎臼歯 同定不能	NA92 左	NA92 左	NA93 左	NA92 左	NE92 左	NA93 右	NA93 右	NA92 右	
上顎骨	ON92 左右	OF92 左右	OO93 左						
下顎第2前臼歯 P ₂	OS93↑ 左右 L 30.7 W 13.8	OF92↑ 左右	NA92↑ 右	OO93↑ 左	OR93↑ 左 W 15.4	OK92↑ 左			
下顎第3前臼歯 P ₃	OS93 左右 L 28.0 W 15.2	OF92 左右	NA92 右	OO93 左	OR93 左 L 23.2 W 15.3	OK92 左			
下顎第4前臼歯 P ₄	OS93 左右 L 23.0 W 13.8	OF92 左右	NA92 右	OO93 左	OR93 左 L 23.5 W 17.8				
下顎第1後臼歯 M ₁	OS93 左右 L 23.6 W 13.1	OF92 左右	NA92 右	OO93 左					
下顎第2後臼歯 M ₂	OS93 左右 L 27.6 W 11.7	OF92 左右	NA92 右 ↓	OO93 左		OK92 左			
下顎第3後臼歯 M ₃	OS93 左右 L 27.6 W 10.5	OF92 左右 ↓		OO93 左 ↓		OK92 左 ↓			
下顎臼歯 同定不能	OR93 左	OO92 左	NE92 左						
下顎骨	ON92 右	NA93 左	ON92 左右	OR93 左	OK92 左	OF92 左右	NA92 左右		
頭骨 (破片)	ON92 左右	OF92 左右							
寛骨	ON92 左	NA93	OF92						
上腕骨	NC93 右 体部	NF92 右 遠位	OO93 左 体部						
暁骨	OF92 左 遠位	NF92 左 体部							
尺骨	ON93 右 体部	OF92 右 体部							
中手骨	NA91 右 遠位	OF92 右 近位	ON92 右						
大腿骨	OG92 右 遠位	OF92 左 体部	NA93 左 体部	OG92 右 体部					
脛骨	OF92 右 遠位	OF92 左 体部	ON92 右 体部						
腫骨	OG92 左								
距骨	OG92 左	OG92 右	NA93 右						
中足骨	OS93 右 近位	ON92 右 近位	OO93 右 近位	NA93 左 完存					
中手・中足 同定不能	OT93 遠位	OR92 左 遠位							
基節骨	OF92 左								
中節骨	ON92 右								

ウ シ			
上顎歯	OR92 左 P ³ L 40.0 W 18.8	OR92 左 P ⁴ L 39.0 W 25.5	OR92 左右 M ¹ L 33.3 W 24.3
	OR92 左右 M ² L 35.5 W 23.0	OR92 左右 M ³ L 33.6 W 27.2	
中手・中足骨	OF92 右 体部	NB93 左 体部	NC93 右 体部

イ ス			
下顎骨	OF92 左右	OF92 右	

シ カ			
中手・中足骨	OF92 右 遠位		

○上下の矢印は同一個体のものであることを示す。

○歯の下段の数字はLが歯冠長、Wは歯冠幅を示す。(いずれもエナメル部)

○四肢骨で体部とあるのは骨幹、上下の関節部を欠くもの。近位というのは中軸骨、脊椎、頭部に近い関節端、遠位というのはそこから遠い関節端を示す。

tab. 7 動物遺存体部位別出土量表

2 平城京以前の遺物

このたびの調査範囲内では、平城京の造営以前に該当する遺構は何も見つかっていないが、特にS D920の堆積土からは、奈良・平安時代の遺物に混って、縄文時代の石器、弥生式土器や石器、それに古墳時代の土器等が少量発見されている。

A 土器

弥生式土器、古墳時代の土師器、須恵器、埴輪等がある。これらはいずれも元の位置を保つものではなく、奈良時代の土器に混在していたものであって、付近に何らかの遺構あるいは包含層の存在を推測させる。5が井戸（上層）出土で、他はすべて西側溝S D920出土である。

弥生式土器 壺または甕の底部が2点ある。10は平らな底部に木葉圧痕がある。底部から外にのびる体部の割れ口は内傾する擬口縁状を呈する。暗褐色で胎土に砂粒を多量に含み焼成は軟質である。器面は荒れて手法は観察できない。底径8.2cm。9は平らな底部で中央が小さく窪む。内底部は蜘蛛の巣状の調整痕を残す。茶褐色で砂粒を少量含む。軟質の焼成。底径6.6cm。9は後期（第V様式）、10は中期前葉（第II様式）の可能性がある。

土師器 杯・高杯・甕・甑がある。杯は口縁部に段をもつもので、布留式の小型3種の器種を構成するもの（1点）。高杯は脚部の破片（11点）。甑は多孔式のもの（1点）で小片のため図示できない。**須恵器** 杯身（10点）、杯蓋（6点）、鉢（1点）、罌（1点）、提瓶（1点）、甕（1点）のほか不明品（2点）がある。

8はミニチュアの甑である。片方の把手を欠くほか完存する。平らな底面に口縁部が直線的に開く。やや偏平な感じを与える。底面には中央に1個、その周囲に5個の甑孔を焼成前にあけている。甑孔は刃物で抉りとっている。体部中位やや上より外面に角状把手をつける。口縁端部は内傾し、凹面をなす。把手はヘラケズリとナデで調整する。口縁部内外面はロクロナデ、底部はナデ、底部周縁は手持ちのヘラケズリで調整する。底部内外面に薄く粘土を補強（穿孔前）している。暗灰色、硬質の焼成である。口径8.0cm。高さ4.2cm。

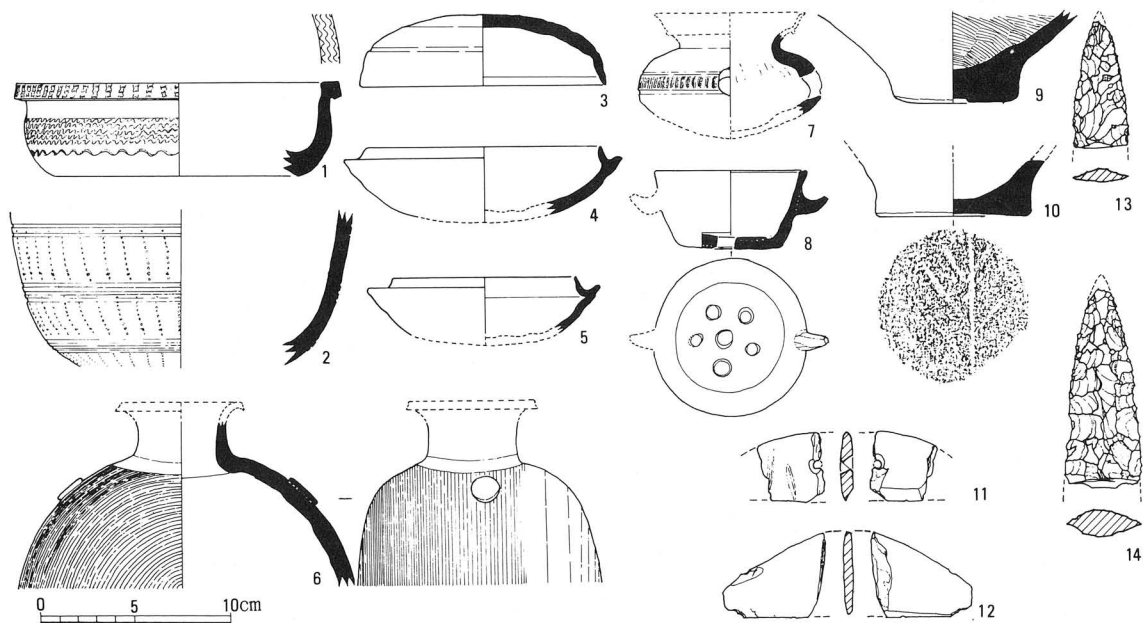


fig.39 京造営以前の土器・石器実測図

7は扁平な体部中位に上下を沈線で区画した縦の列点文をめぐらす隙で、1孔(径1.1cm)を外面からあける。肩部内面にシボリメがある。青灰色で砂の少ない精良な胎土で強く緻密な焼成。

5は内傾する短い立上がりに外上方に伸びる受部がつく杯身。底部中央よりにヘラケズリの痕跡がわずかに残る。表面が暗青灰色で断面は暗紫色。白色粒子をごく少量含む。極めて堅い焼成である。受け部に重ね焼き痕跡がある。口径9.8cm。

4は丸い底部に短い立上がりをもつ杯身。青灰色を呈し、白砂を含む。硬質の焼成である。復原口径12.4cm。

3は杯蓋である。頂部と口縁部との境は浅い凹線をなす。頂部中央はロクロケズリ調整(ロクロは右回転)。内面中央はナデ。青灰色。白色砂粒を多量に含む。硬質の焼成。口径13cm。高さ3.7cm。

1は体部がまるい椀形で、外方に折返し気味に肥厚させた口縁部をもつ土器。口縁部上面は平坦にする。底部はあげ底になる。口縁部上面と体部中位に櫛描波状文を飾り、口縁部外面に刺突による列点文をめぐらす。体部の波状文の施文の順位は、1条の波長の大きな波状文が先でその上の5条1組の波長の小さな波状文が後とみられる。櫛描波状文と列点文とは施文原体が同一の可能性がある。口縁部外面折返し下のロクロナデは波状文の施文より後に施される。表面は暗茶褐色、断面は茶褐色ないし暗紫色を呈する。胎土には白色の微粒子を多量に含むが総じて緻密な胎土といえる。焼成は極めて硬質である。口径17.0cm、高さ5.0cm。日本の須恵器には例をみず、新羅の陶質土器などの外国製品の可能性がある。

2は鉢と考えられる。まるくひらく体部に2条及び3条1組の沈線をめぐらしその間に突刺し列点文を縦に並べる。沈線は1本ずつつけたもの。口縁部内面から底部はナデ調整。青灰色で白色細砂を含み硬質な焼成である。

6は提瓶である。扁平な器体の横に孔を開け、別作りの頸部を取付ける。両肩部に把手の退化したボタン状の薄い小円板を貼りつける。片面はカキメ、片面はロクロケズリ(ロクロ左回り)で調整する。青灰色で胎土に白色の微細な砂粒を含み、極めて硬質の焼成である。体部の復原径18.0cm。

埴輪 円筒埴輪の小片が11点ある。うち1点は朝顔形円筒埴輪である。埴輪はすべて土師質のものに限られ、須恵質の焼成のものはない。

B 石器

石器には、縄文時代に属すると思われる凹石1点、弥生時代に石包丁2点、石槍2点がある。

凹石 長径10.1cm、短径8.3cmの楕円形をしており、厚みは6.3cmあってやや扁平である。上・下面のほぼ中央には径2cm前後、深さ0.5~0.6cmの凹みがある。楕円形の外縁にはほぼ一周して敲打痕があり、両面の凹みに指をあてがって石塊を掘り、堅果類を潰すのに用いたものだろう。

石包丁 2点ともに片岩系の石を使用し磨製で、 $\frac{1}{2}$ 以下の断片であるが、片刃で直線刃半月形をしたものであることがわかる。11は両端が欠損しているが、身幅のほぼ中央に紐孔が1ケのみ残っている。両面より直接穿孔している。刃先には使用痕はほとんどみられない。12は一端のみ残り紐孔もない。刃面は狭く、刃先には使用による磨滅痕がある。

石槍 いずれもサヌカイト製で、13は薄身で小型、14は厚身で中型品といえる。

以上のほか同溝からは、サヌカイトの大小剥片20点余、黒曜石剥片1点が出土している。